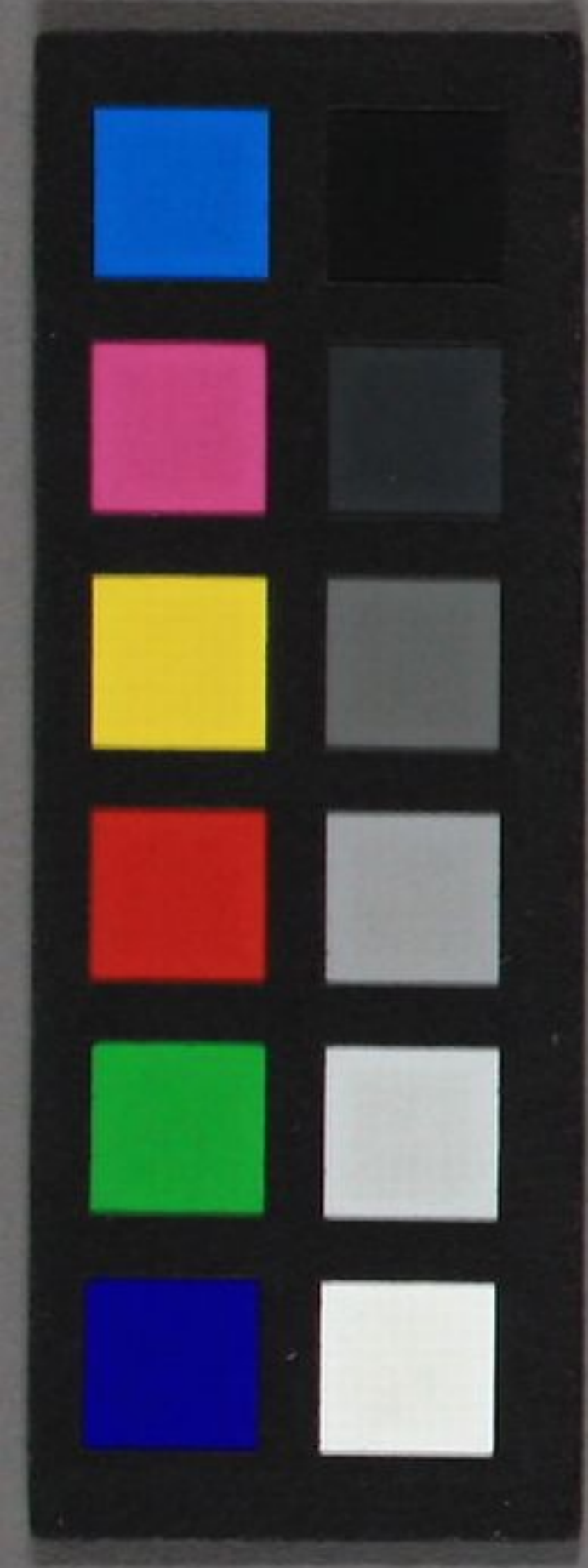


長篇叙事詩

炭坑夫

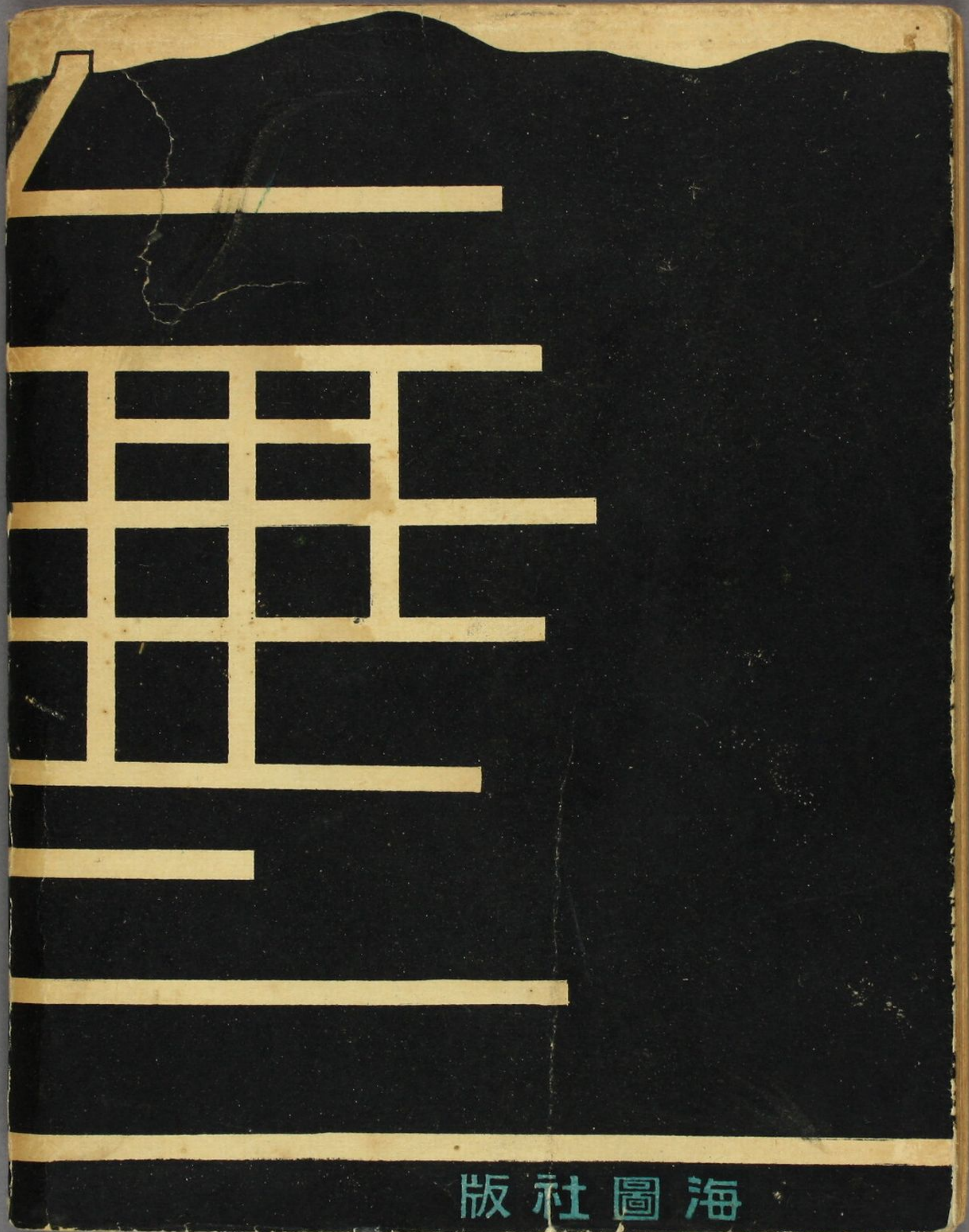
著 重信 藤佐



炭

坑法

佐藤信重著



海圖社版

炭坑夫

長篇叙事詩

炭坑夫

佐藤信重著

著重信藤佐

版社圖海



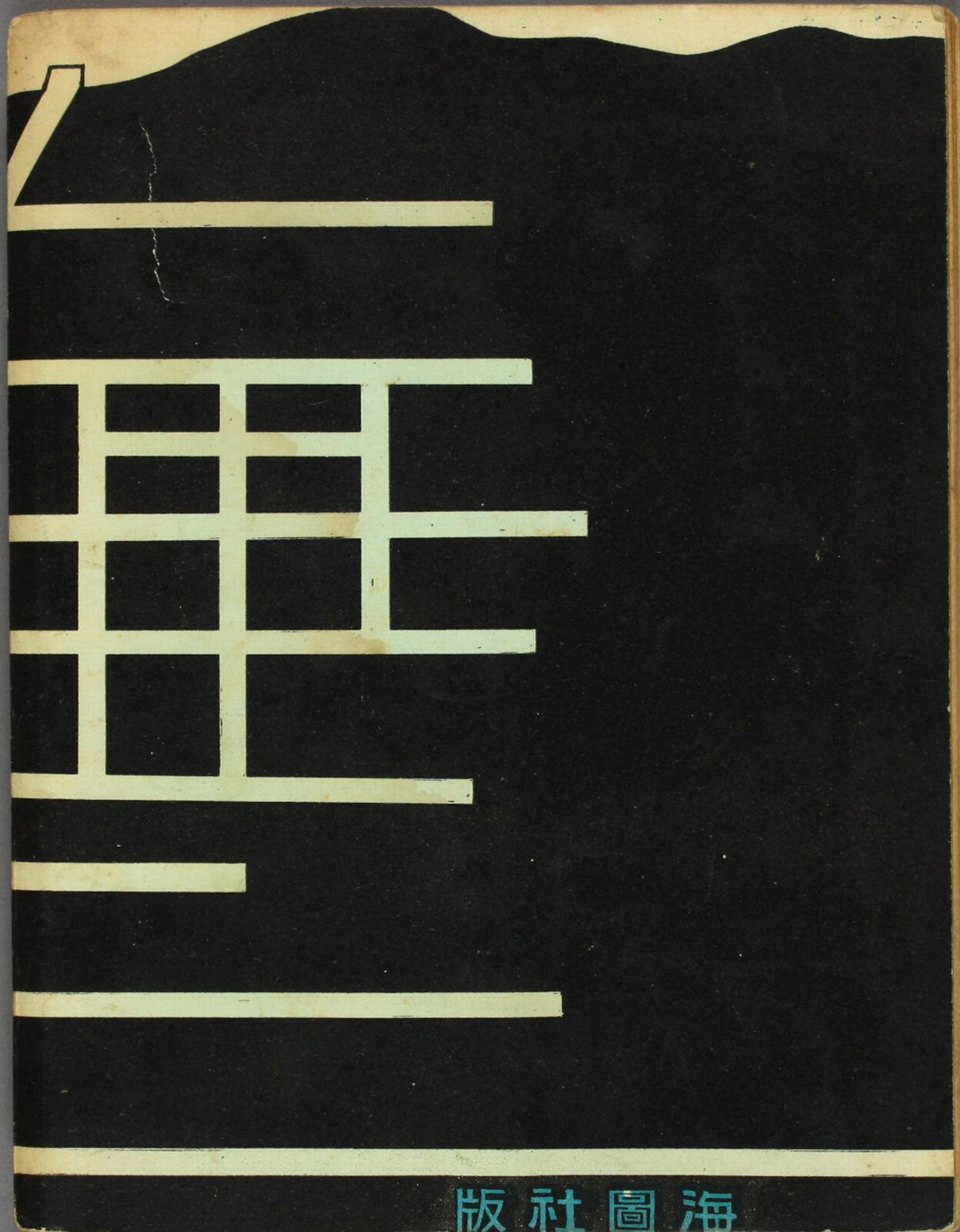
長篇叙事詩

炭坑夫

著 重信藤佐

炭坑夫

佐藤信重著



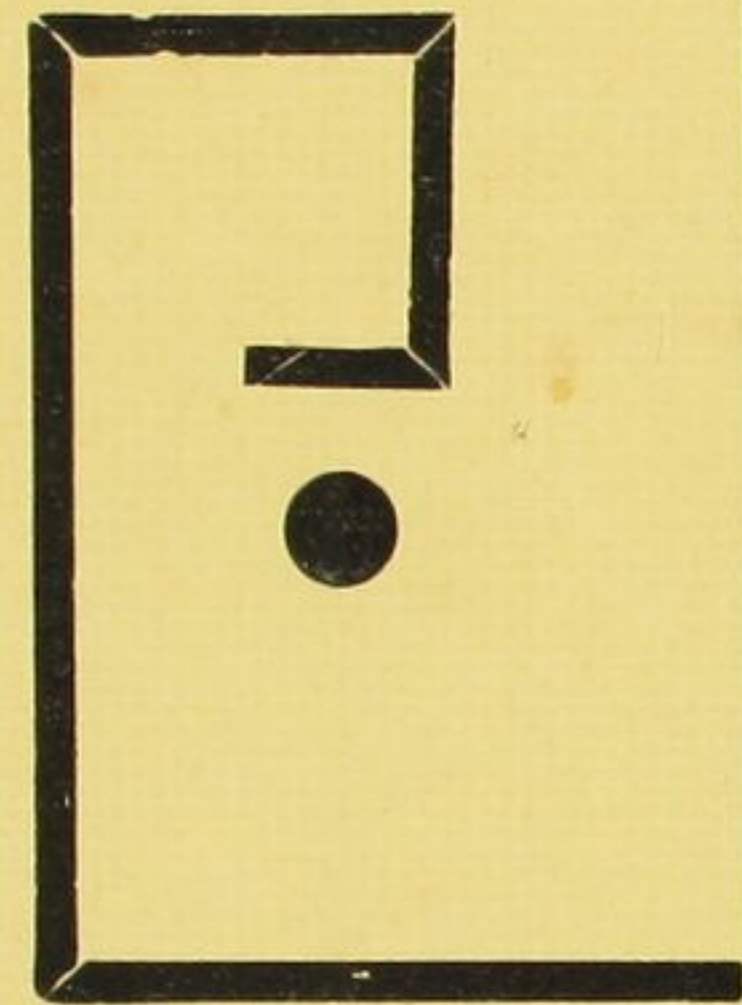
海圖社版

松村唯
人藏書

長篇叙事詩

炭坑夫

佐藤信重著



海圖社版

故生田春月氏の靈に捧ぐ

自序

私が炭坑生活から足を洗つて歸京したのは、大正十二年の初夏であつた。それから既に九年の歳月が流れた。かつて私が炭坑生活上に抱いてゐた思想は、當時こそ新鮮さがあり尖鋭であつたかも知れないが、現在では一般の常識となつてゐる、否常識以下であらう。だから此「炭坑夫」の中に含まれてゐる思想は、古いと一蹴されるかも知れないが、何故私は自分の詩集を差置いて、叙事詩を世に出さうとしたのか。

其處には一つの動機があつた。生田春月氏の死が夫である。此一巻を澹雲院孤峯春月居士の靈に捧ぐる所因である。氏は最初に「炭坑夫」を讀んで其出版を慫慂されたが、當時客氣に疾る自分は夫を抑制して隠忍した。まだ自信がなかつた。けれども今日自分は、既に而立、一つの信念をもつて世に處する様になつたので、此一巻を上梓する事に意義を見出した譯である。自己流の意義を……粗剛な人間が、眞實を見詰めて進む時、其處にどんな事件を捲起してゆくか。此主人公はインテリゲンチヤではない。無智な坑夫に過ぎない。だが向上心の強い男だ。一步一步、テンポは遅くとも進んでゆく性の人間だ。才子肌の早呑込みをする人々が多くなつてゐる現代には、かうした牛のやうな、巖のやうな、人間の存在が必要であらうと思ふ。彼は感傷家である。また野性的な放縦さを持つてゐる。正しいと信じた途を邁進する勇氣をもつてゐる。従つて英雄的な結果を來してゐるが、彼は決して英雄ではない。飽迄一炭坑夫なのである。女主人公の方は天草島特有の野性を充

分にもつてゐるが、矢張り眞實の光りにめざめることの出来る純粹さをもつてゐる。

かうした人間を中心にして、炭坑に起つた事件の數々を、私は自分に最も表現し易いと思ふ叙事詩の形式を採つて書いたのである。この事件の數々は、すべて私自身の體驗によるものであるが、それを充分に表現し得ない齒痒ゆさを感じてゐる。壓縮して、出来るだけ無駄な文字を除いたが、まだまだペンを入れる余地がある。然し、今、私はそれをして此作を書いてゐた當時の情熱を枯死させたくはない。荒削りのまま、山から堀り出した岩石のまままで、其處に一つの「取柄」を見出したいと思ふ。

此稿を脱稿した日、私は次のやうに書いて卷末に綴り加へた。

『私は此叙事詩「炭坑夫」を書く爲に、始めて苦悶の淵を泳ぎ廻つた。自らを深く堀り下げてゆく時、其觀察と情熱とが融和して逆しるまで、私は平面的な表現を避ける爲に、苦しんだ、悩んだ、焦つた。或時は一日に二行位しか書けない事があつた。全然ペンのとれない日もあつた。そして此作を中止しやうといふ氣持に襲はれた事は幾度となくあつたが、猛然として立直つた。苦しみ面に面してペンをとりつづけた。』

生田春月氏夫妻は私の情熱を煽つて下すつた。衰へかけた情熱を注いで下すつた。そして叙事詩が確立した地位を占むる爲に、あらゆる犠牲を惜しまないやう忠告して下すつたのだ。今、完成して心から感謝の意を表する。炭車顛覆の章に於て、私を激勵して下すつた言葉の數々を思ひ出しては、自らを勵まし勵まし、受難者のやうな氣持で進んできた。

また忘れてならないのは西崎滿洲郎君の友情である。(西崎君も既に故人となつた。春月氏のよき助手であつたが……)彼は私の原稿を少しのわずらはしさも見せないで、朗讀するのを傾聽してくれた上、種々と其感想を忌憚なく言つてくれた。私はペンがびたつと止ると、直ぐ彼の家を訪ね

ては朗讀した。そして何かしら情熱の補充をしてくるのだつた。かうして勵まされ、やうやうこれを脱稿したのだ。西崎君は助産婦である。此「炭坑夫」の隠れたる補助者である。

かくして生誕した叙事詩「炭坑夫」。

私は重荷を下ろしてほつとした。清々しい歡喜が湧いてくる。晴々しい氣持である。』

私は茲で故西崎滿洲郎君の靈に感謝の意を表する。彼の跋文が得られたらどんなに喜ばしい事であらうに……。

序文を書いてくれる約束だつた生田春月氏が故人となつたので、私は此麼自序を書かなければならなくなつた。他に御願ひして箔をつける程の作でもなし、私は此書を手にもされる方々が、何物かを此一巻から感じて頂ければ幸ひなので、敢て他に序文を求めなかつた。跋文も附さなかつた。若しも此主人公が生存してゐたならば、彼天野五郎に跋文を書いて貰ひたかつた。

私は天草島の地方色ローカルカラーを出す爲に、會話の大部分は方言を用ひた。これは天草島特有の方言といふよりも、長崎、熊本、福岡地方の方言が加味されてゐる。炭坑は一つの寄合世帯であつたから、自然言葉は「雜種性」を帯びてゐた。卷末に方言の意味と、炭坑の術語の大意とを簡単に記しておいたから参照されたい。

此書を上梓するに際して、種々御配慮を乞ふた先輩知友諸氏の御厚志に深く感謝の意を表する次第である。

昭和六年流汗銷夏の時

佐藤信重

炭坑夫

目次

自序	(一)
闇に立上る男	(一)
地底に働く女	(九)
めざめたるもの、うまるるもの	(一六)
地底の暴風雨	(二三)
漁村の夜	(三二)
海濱の處女	(四一)
情花ひらく	(四六)
戀するもの、嫁ぎゆくもの	(五五)
純情・悔悟	(六三)
返書	(七二)
坑内瓦斯爆發	(七七)
黒い手、白い手	(八四)
美しき性	(九四)
浄化の淡雪	(九八)
永遠に生きるもの	(一〇五)
附記	(一〇五)

闇に立上る男

疲れた、ああくたびれた、
俺はまだ若いのに
どうして此處に老けた氣持になるのだらう、
慰めのない生活
苦しむ爲に生きてゐるやうな今日此頃、
妻はあつても、どうだこのいきたない寢姿、
高い心情、濃やかな愛
そして良人を理解する力さへ缺けてゐる女、
慰安のない俺だ、
子供も生れない、
この單調さと苦痛とはいつ迄續くのか、
毎日毎日の石炭掘り
土筆が土手に芽生えてくるのに
未だ寒さのきびしい時候だ、
春着の支度も出来ない俺、
眞黒に汚れる事と
石炭の粉を胸一杯に吸ふ事が

この若い俺の仕事なのか、
ああ疲れた
二十六年の足跡さへも影うすい。

遅しい肉體の男が
春宵の甘い氣配を怖れるやうに蹲り
荒木造りの汚れた机に
労働問題の書籍をひろげて黙々と考へる、
狭い室、坑夫長屋のがさつさが
羽目板の隙間から夜の眼をのぞかせる。

薄い夜具にくるまつた女は
ふつくりとした頬を枕につけて
労働の疲勞を忘れてゐる夢路。
閉された臉の奥には
無氣味な瞳孔が濼んでゐるだらう、
それは暗い過去の秘密を物語る、
その風のやうな言葉
音のない話聲
眠つたものの閉ぢた眼が物語る話。

男は弾ぢかれたやうに立上る
單純な頭に喰ひこんできた思想の渦が
彼の魂を懷疑の底へと落しこむ、
人生に、愛に、夫婦生活に
そして自分自身の魂にさへ
懷疑の靄は立籠める。

頭を一つごしつ！と殴りつけて
男は電燈のスキツチを捻つた、
闇、闇、女の寢息……………
その中に男は冷えきつた体を横たへた。

俺の半生を振返れといふのか、
闇の聲よ
此蝕まれてゆく人間をみてくれ、
省る俺の魂は
常に悔恨の烈しい鞭で打たれ続け
労働に疲れた肉体が
すたすたと刻まれてゆく
光りのない生活、闇の觸手、

ああ俺はその觸手だつた。
十六の暮から十年

生命を怯やかす生活にひたりきつて
虚偽と不正との傀儡、
俺の童貞は十五に破れ
女を次々と代へてきた性慾の權化か……

そして全身に痒く悪質の病ひ
それから總てを拭ひ去る爲に
俺は三年といふもの苦しみ續けた。

總ての病魔が去つて了ふまで
賣藥療法と節制、そして勉學
そこで俺の眼が開いた、
其處で明瞭りと人生が見えた、
かうして現在に満足してゐる今

俺の受難は酬みられる、
苦しみが徒勞ではなかつたのだ、
此女との生活

それももう三年も経つた、
島の女は淫らときいたが
感心なことにこの女は……………

だが、まて、いや、いや
疑ふことはいけない！

男は闇の中で呟く
大きい煩悶の毘に引掛かつて悶え始める。
「おい、おい、起きんか！」
女を揺起す男の眼は
はや烈しい熱情の焰に包まれ
疲れきつた妻のからだを
がつきと許りにかき抱く。

x

曉の眠り足りない味氣なさ、
鶏の朗らかな聲に
山合ひの部落が朝靄の衣を脱ぎかける時
うつとりと新聞張りの天井を仰ぐ顔——
天野五郎はむつくりと起上る。
労働が嚴然と控へてゐる炭坑の朝
それに直面して彼は立上つた。

炊事場と玄關を兼ねた入口に
おあきの麗はしい瞳が微笑む、
「仕度はよかですばい

顔ども洗つてきまつせんか」

やがて朝の食卓、
貧しい朝食だ、
そして若い夫婦は仕事着に着換え
鶴嘴と鋸と女の使ふ雁爪を
椽の下から引すり出す、
尻切絆纏、女の猿股

快い冷氣に觸れて濕つた草鞋をはく男、
ほつれ毛を搔き上げて姐さん冠り
女は食器を片づけて辨當を包む。

外面にはもう人々の歩みが
部落から炭坑の坑口へと
春の朝を忘れたやうにせかせかと續く。

戸締りをするでもなく
天野五郎とおあきとは仕事場へ、
繰込部屋へと人々のあとを追ふ。

部落の朝は未だ早い
鶏鳴はあちこちに
靄を破つて春眠を襲ふ。
山の出鼻、赤土の道

そこを曲ると、風景は展開される、
活気みちみちた人間の力が營む事業
炭坑の全景は前夜よりの活動を繼續し
汽罐場には汗みどろの火夫が
ランカシア、ボイラーの前で眞赤だ。

繰込部屋への道は汽罐場前を通り
選炭場の中を突切つて進む、
坑夫の群が打續く途上
山を越えた漁村からの出稼ぎ娘達が
元氣よく喋りながら坑夫等にからかふ。

安全燈室の老爺はせつせつとランプを磨き
助手の若い娘はもう數十の安全燈を窓口に
揃へた。
總ての用意はととのつた、

採鑛課には現場員がぞくぞくと詰めかけ
傳票が書かれ、採炭個所が決定され
坑夫頭はそれらをまとめ繰込部屋へと這入つ
てゆく。

ここはまた何といふ處だらう
虐げられた人間の渦が捲く
競賣臺の前のやうだ、
株式取引所の場のやうだ、
土間には小さい爐が二つ
まだ寒い朝の冷氣に慄えてゐる坑夫らを
少しの間でもと温めてゐる。
一段高い壇上には坑内係がかたまつて受持區域
の坑夫らを

きよろきよろと探すのに忙しい、
坑夫頭は鋭い聲で
採炭個所とその切羽への坑夫を呼ぶ、
そして渡された傳票を坑夫達は
ほつとした安堵と
作業仕易い切羽に當つたよろこびや

また難儀な苦しい切羽に
廻された不満などの數々と共に腹掛へとしまひ
こむ。

女達は坑木運搬や石炭運搬
溝浚ひなどの仕事を振當てられて
雁爪とほげを小脇に坑口へ――

かくして一人一人と労働の場所をきめられ
廳で逞ましい天野五郎は呼び出される、
左四片本卸砕入れ！
赤い傳票に走り書の文字
今日は悲しくも夫婦は引裂かれ
男は割のいい修理工事
女は更に地下深く二千尺の底
右九片の溝浚ひ！

坑夫らはぞろぞろと坑口へ急ぐ、
力強く大地を踏みしめて坑口へ！
やがて朝の氣配は色濃くなり
けたたましい汽笛は汽罐場の上空に炸裂し

工作場のエンジンは運轉を始め
海近い火力發電所ではスキツチを入れる。
選炭場の女達はトロツコを押し
事務所では給仕の娘が茶を運ぶ。

早朝の氣配は消えた！活動の時！
坑口の捲揚機はガランガランと運轉を始め
四十度の傾斜を人車は頻繁に上下する。
其度に坑口の坑夫らは姿を消して
ただ物凄い死の豫感にみちみちた炭車が
勢凄じく地下へと突入する、
深い闇の中に盲滅法の驀進！
一寸二分のワイヤーロープは大きく波うち
天井の枠やレールの枕木に磨滅されて
不安な豫感を人々の鈍い感覺へとまきちらす。

坑夫等は此危険に直面して平然と入坑する、
春の山路でも散歩するやうに
小鳥の歌でも聞えさうな麗らかな氣持で
おお叛逆を知らぬ善良な労働者達よ！

×

入氣坑の爽快な人車疾走！

坑夫を満載した鐵棒の人車は
眞幕らに地底の核心へ！

その凄じい音響を岩壁に反響させて突進する。
四十度の傾斜を滑つてゆく爽快さ！

捲立には百燭光の電燈とポンプ室からの響き
また左右に別れた坑道の入口には火番小屋

其處のほの明るい安全燈の光りを一瞥の間に
見やつて

人車は轟々と地下に喰込む。
一片、二片、三片と各坑道の札をよむ度に

満載の坑夫は少しづつかけてゆく、
左四片！

此處では逞ましい坑夫等のみの下車、
天野五郎の懐々しい筋肉美は

はや半裸体の上に光り出す。

闇の臭氣、沈黙の空氣

不氣味なポンプ室の響きが岩層をつたはる。

一組にされた四人の坑夫は
左四片の火番へと這入つていつた、

其處には足の不自由な中年の男が
嘗ては獐猛な炭坑荒しとして

活躍した面影の頬創を
うす黒く光らして愛想笑ひ。

「どうれ、煙草一服

おやぢ煙管をかしてくれ！」
安全燈の灯がぢりぢりと燃え上る、

坑夫等は代り代り
一本の煙管でのむなで、この味。

さて！と素裸になつて出る捲立
そこは先刻人車を下りた場所

直徑尺餘の支柱が碎け
天磐の岩石は危く落ちかかる。

「兄貴！危かぞ！」

坑夫の一人は天野五郎の背後からよびかけ

鶴嘴と鋸を彼の手に渡す、
危険な作業の開始前

一同の心は堅く引締る、
敏感な聽覺、視覺の透徹さ

そして力は烈しい掛聲と共に加はる。

みよ！此地底に働く彼等の姿を！
かくも眞實に、かくも生を賭して

生活を切拓く勇士の姿を！
天野五郎の熟練した腕の力は

岩を碎き、支柱を外し
協力と努力との結果、新たな支柱は完成される、

そこには汗の泉、勞力の丘
また体内を蝕む腐敗した空氣。

健康の裏に潜む病魔の牙は
きしきしと磨きをましてくる恐ろしい豫感。

四人の坑夫が懸命の勞働を續けてゐる間
本卸を上下する炭車の勢ひは素晴らしい、

一本のワイヤーロープによる十函の炭車

その連結元に確かと蹲る乗廻しの勇姿、
一步踏み外したが最後

轉落か轢傷か、或はロープに跳ね飛ばされ
る危険の瀬戸際、

この難關に平然として直面する乗廻し
坑夫の華、炭坑の旗手

名譽にかけて勤める華やかな職務。

「おい、少しは休めよ、兄弟！
もう八分通りは出來たんだ、

一服やつて、晝食でもやらうぢやつか」
「腹が減つたのう

飯くはんばひもじかばい
ポンプ室へ！兄貴一足先へゆくでの」

頭上から響くポンプ室の音
汗ばんだ体、汚れた体

それらを洗ひ落す爲に四人の坑夫らは
右三片のポンプ室へと昇つてゆく。

胸を突くやうな斜坑

木路の朽ちかけた危さ！
天井枠の撓つてきた地壓の恐怖
その中を四人が昇つてゆく、
一步一步呼吸がはづみ
ポンプ室の響きが強まってくる。
通風戸を排して這入るポンプ室
そこは廣々とした岩窟だ、
十吋鐵管が壁間を縫ひ
蒸氣管は保溫劑を施されたままヂョイントか
らのスチーム噴出、
二十四吋のエヴァンスポンプが二臺
生物のやうに身慄ひして運轉をつづける。
おお此窟内の熱氣！
運轉監視の職工は素裸で
莫藪の上に長々と寝そべり
うるんだ眼を天井に――
その伸びきつた皮膚は力なく
ただ鋭い聽覺がポンプの運轉に注がれる。
ここは原始の窟、人々は衣服をつけない

今日はよか仕事ばしあるかの？
中年の男はだらりとした頬をなでて
逞ましい坑夫らへの愛想笑ひ。

坑夫等は辨當をひらいて箸を動かす、
澤庵四切れ、生味噌、――
ごま鹽、鹽引
かうしたお茶に舌鼓を打つ彼等の幸福さよ
食慾は素晴らしい
白い飯だけで充分
米の味がわかつたら上等
生活に苦しめられる時などの彼等は
甘味のない甘薯で我慢さへする。
食べ終ると立上つてスチーム管に近づき
たらたらと落ちるヂョイントの蒸溜水を
ニウムの蓋に受ためてお茶の代り、湯の代り
それで満足、渴も醫され
労働の氣力が潑瀾と甦る力の水。

それは聖餐だ！

肉体はそのまま生れ出た姿のまま――
醜惡の觀念は既に殺戮された、
美の觀念が極度に壓縮されて
筋肉と倦怠と、そして熱氣に上氣した空洞の頭
脳に
人々は美の相を見出すのだ。
そしてここ坑内では
肉の觀念が餘りに魅力なく
性慾は三度の食事よりも單純に考へられる、
お互ひが素裸だ、
餘りに赤裸々な男女の姿
魂迄も眞二つにしたやうな姿だ、
此處には戀が芽生えぬものか。
枯れきつた情熱を辛くも支へた天野五郎は
今このポンプ室へと姿を現はす、
粉炭に汚れた肉体を
蒸氣に熱せられた坑内水の溜桶で洗ひ
職工の側に体を投げ出す、
「きつかのう

正しい者のみをとる淨い食事
自分を忘れて働く者のみに與へられた幸、
だが天野五郎は
果してこの聖餐に加はれる男か？
彼の魂には今大きいあらしが訪れ
歪められた正義の觀念から脱しやうとしてゐ
る秋だ。
装ひをした虚偽の生活から
素裸な眞實への生を辿らうと焦つてゐる彼で
はないか。
従順な、金錢次第で働く男ではなくなつた
眼隠しをかなぐり捨てた姿
眞理に直面した人生の探求者
今彼は自分自身を刻みこみ
深く深く刀の剃りも鮮やかに刻み續ける。

地底に働く女

ここは熱氣の煮え沸る岩窟だ、
坑木はじくじくに腐蝕しかけ

悪臭と瓦斯体とを坑道一杯にまきちらす、
其中で素裸の人間が力一杯の仕事
男は坑道の修理、またレールの枕木取替
新たな坑道の開鑿に精根をすりへらす、
木の香高い松材を引張るのは女の仕事
また坑内湧水の樋を浚つて
ポンプ室への落水を完全にずする仕事。

今天野五郎の妻おあきは専念に樋を掃除する、
白い股をすぼめ乍ら
かがみこんで雁爪を使ふその姿、
柔らかな肉線の美

そこには成熟した女の魅力
爛れるやうな感能の蠱惑がひそむ。

若い坑内係が勢ひよく

坑道の奥から懐中電燈を照らして出て来た。

「おお綺麗なたばい

水はけはどがんかの？」

燃えた眼、ぐいと首をのぼして

おあきの頸筋に熱い呼吸！

血潮のうづき！

「好かんひと！いやですばい

そんげん事あ奥様にすることですばい」

彼女の眼はあやしく怯え

また艶々しく

薄明りの中に男の若々しい顔を見つめる。

それは嫌悪の眼差しではない、

憤怒の面でもない、

柔らかな愛のただよひ

媚態のひとつ。

若い男に戯談はれるよろこび

それは女の若さにのみ

恵まれた生命の一つではあるまいか。

そこに自尊の芽と誇りの花が

豊かに豊かに培はれる。

おあきは仕事の手を休めて

若い坑内係の差出す懐中電燈に

ふくよかな頬を委ね

また意味深い暗示の微笑で

輝やいた暗の中に物語る。

「遊びにこんか

合宿は男ばかりで寂しかばい、

みんなは村に夜遊び

俺は獨りでさびしかよ、

のうおあき

話相手が欲しいんたい」

元氣なこの魅力ある男は

誘惑の言葉を捨てて休息所へと去つていつた。

坑内水は地熱の爲に温湯のやうだ、

勢ひよく樋を流れる六十立方呎の水

それは炭坑にとつて恐ろしい脅威のひとつ

排水作業は炭坑の心臓部

その偉大なる作業の爲に

おあきの小さい力は一つ一つ建設のしるしを
たてる。

樋を浚ひ了へて一休み

ごろごろした坑木の上に腰を下ろす、

ひつそりとした坑内、右にも左にも

灯のかけはなく、音もない

遠く本卸を上下する炭車の響きが

地底の呻き、そのものの象徴。

安全燈の光りはたよりない

いつ消えるとも知れぬ細々さ

人の生命がここにも思はれる

闇の中、闇の匂ひにみたされた周囲。

閑寂な山中の氣配が甦へり

眼をつぶつて思ひを深めるその境地！

ああ然しおあきの胸は烈しく躍る、

坑内係の言葉は力強く

活々と炎をたたへてその胸に

若い女の心をかきたてる導火線。

良人の氣難かしい近頃の面持よ！

難解な讀書に没頭する味氣なさよ！

少しも顧みてくれない愛情の枯渴

心の暗い日が多い、

華やかに、心からの微笑をおくれない此頃
おあきの胸には大きい空洞が出来た。
そこは爛熟の室
若い情熱の訪れをまつてゐる室、
其處に飛込んだ坑内係の甘いささやき
彼女ははや甘やかな空想に耽り
闇の地底に
美しい花園の幻を描く。

坑道の奥からレールの軌る音がして
石炭を満載したトロツコが走つてくる、
赫黒い肉体の一部が
颯とおあきの眼前を過る。
疲労と苦しみとに色彩られた蒼ざめた坑夫
の姿
黙々と、其仕事に満足しきつた男のかけ
みんなが満足してゐる、
霞のかかつた眼を完全なものとして信じて
そこに誤謬の人生觀をこね上る、
明るい人生を知らない人達

暗い生活と
本能のままに生きる其事に愉悅を覺え
生の感謝も
死の恐怖も
またその悟りも
總てを考へやうとしない坑夫の心情。

漁村で生れ
荒磯育ち
そしてお座なりな教育をうけたおあきに
この多彩な人生の評價を強ひることは
無理だらうか、當然か
淫らな生活を當然と考へる此島で
處女を求め貞婦を探す
それは大きい徒勞ではあるまいか。
醒めた人間のみが
光りを見出した人々のみが
受難の矢面に立つて闘ふ眞實さ！

×

狭い採炭切羽から降りてきた坑夫等が
また坑道の掘進にダイナマイトをかけて成功
した坑夫等が
各々その道具を肩に捲立へと出てくる、
昇降時間だ！
一日の勞役を終へて休息への時が始まる、
其日の作業をあれこれと語り合ひ
請負作業の案外にたやすい悦び
また硬岩に出會しての苦しい勞働
それら難易様々の話しあひが
安堵の面持に色彩られた人々の心を和める。
彼等は地底に居る事を忘れてゐる、
いま夕陽が天草灘の彼方に没しやうとする時
地下二千尺の坑道に蠢いてゐる人間、
光りを仰ぐまで
メスのやうな運命の危険を
彼等の心は感得しないのだ、
慣れてしまつた大きい懼れよ！
合圖の綱がひかれた、

もう炭車のくるの間もないだらう
人々は坑内水で體を洗ひ
粉炭にまみれた顔を
頭を、その眞黒い水で平然と洗ひ落す。
鶴嘴の先端も光つた
鋸の柄も、斧の刃も
すつかり洗はれた心地よさ。
廳で礫のやうに疾走してくる十臺連結の炭車、
空いた炭車は、既に満載された炭車と取替へ
乗廻しの鋭い聲が斜坑にひびく。
「捲くぞ！乗つたか！」
坑夫等は炭車と炭車との間に体を狭み
辛くも足を踏張る危い仕科、
坑道の奥から
狼狽て飛出した坑内係は
ひらりとばかり乗つてしまふ、
ここにも使用人と被使用者の
胸痛い階段がひとつ見られた。
坑夫等は二尺たらずの炭車の間で二人づつ乗

るが

坑内係はただひとり
相乗りを許さないひとつの特権がある。

合圖はされた!

十臺の炭車は烈しい重味に耐へ乍らぐいぐいと動く。

此時、けたたましい叫びをあげて飛出してき

た女

おあきの美しい半裸体!

「乗せて!乗せて!」

炭車は容謝なく

ぐいぐいと力強く捲上げられる、

「おあき、乗れ!

ここへ乗れ!」

この優しい同情の言葉は

先刻の若い坑内係からとんできた、

あわてて走り上り

手をとられて炭車に乗った彼女の安堵!

「おうきに!

「助かりましたばい!」

闇の中で、轟々と軌る炭車の音にまぢつて
ふくよかなささやき

心を啜る温い手と手の戯れ。

勢ひよく炭車は昇る、

一本のワイヤーロープを生命として

烈しい磨滅を續け乍ら昇つてゆく。

八片、七片、六片……

六片と五片の間は危険な坑道

天井枠は低く垂れ、レールは曲り

捲揚機運轉手の技倆が冴える危険な場所だ。

そこでは幾人も負傷者が出来

地底に生命を失つた者さへある。

炭車は昇る、

ぐいとカーヴを曲つた途端

おおその瞬間!

がた、がたがたがた……と!

おお前方炭車の脱線だ!

「おあき!」

彼女の肉体はぐつと突飛された、

おあきの柔い身体は斜坑の枠間に、

びつたりと押しつけられた、

そして顔面の引吊つた坑内係の蒼い面が

彼女の背後にわなわなと慄える、

坑道は凄じいあらしだ、

石炭は斜坑一杯に狂ひ飛んでの轉落

炭車の恐ろしい響きと枠脚の挫折、

天井磐の崩落!

坑夫等の叫喚!

「ピンが抜けた!」

脱線と共にあの太いピンが

鎖と鎖との連結を断つたのだ!

おお坑夫等の生命は?

炭車と炭車との間に乗つてゐた人々

注意を忘れてゐた慣れきつた人々の身の上よ!

おあきは救はれた、

機敏な坑内係の働きで助けられ

擦り傷一つ負はない幸せさ!

けれども女を助けた男の脊中は
熊の襲撃をうけたやうに蚯蚓膨れ、
乗廻しは坑外に急を報じ
應援救護の人々は續々と
不安の思ひにみたされて入坑する。

見よ!此慘憺なる地底の姿を!

斜坑には石炭の丘!

炭車の破壊した姿が!

そして呻く人間の眞黒な姿!

坑外から飛込んできた天野五郎は

五片の捲立におあきを見出す、

若い坑内係をいたはつてゐる姿

艶々しい輝やきにみちた瞳!

けれども彼は

一言も言はずに六片へ

同僚救助の爲に降りてゆく。

めざめたるもの、
うまるるもの

おお死の恐怖よ！
また烈しい負傷の苦呻よ！
けれども今それらをけろりと忘れ去り
炭坑の生命はそくそくと育くみ續けられる。
僅かの手當で

運命の觸手に觸れた人々の黙々と續ける治療、
無智と疲弊の哀れな姿が
明瞭りと眺められる日——朗らかな春日
炭坑の部落を縦に
縫ひ過る石ころ道を
天野五郎は黙々と歩いてゆく、
山の尾と山の尾の出會ふあたり
舊坑の潰れた廢趾の近く
彼は追憶の眼を思索へと轉じて歩く。

今日は三番方
夜十時からの坑内労働

それ迄の明るい時を自然の姿に
びつたりと寄りそつて過すその心情。
おおこれは酒と女と
勝負事に熱中する坑夫のところか、
あくせくと金儲けに奔走する商人の心か、
高潔な人間のころろではあるまいか、
彼の道は今朗らかに澄んでゆく。

低い丘陵の段々畠
麓の平地に區切られた田
ああ然し此土地には祝福された農家はない、
瘦せ衰へた土壌に
ただ徒らの石灰撒布
無智の努力が土を蝕む。
人々は一時凌ぎの仕事に忙しく
永遠を忘れてただ働く、
男は海に、炭坑に、
女は放逸と夜の世界に——
かくて純朴な農民の姿は
習慣と自然との誘惑に弄され

潰された片眼は永遠に開かないのか。

それら因習の悪夢を打破る男
天野五郎は黙々として地に立つ、
彼の背後には二千の坑夫とその家族が
また淫蕩な島人の爛れた姿が
少しの意志もなく取継る、
片眼の人間がついてくるのだ。

x

炭坑は地熱と闘ひ
地下水の湧出に必死の防禦
そして此嶮しい頂きに人間を虐げる。
傷けられて退く人々、
生命を奪はれて忘れられる人々、
今炭坑に働く者は
選ばれた人々のみだ、
虚偽と不正とに知覺を殺した人々のみが
與へられた健康の盡きる迄
つづけるのはただ労働、地下生活

光りのない生活よ！
一生を闇の中に働き通す人々よ！
彼等は此處を脱け出して
明るい生活の出来ない人々か？
蝙蝠のやうに光りを怖れる人々か？
農夫の忍従さもなく
商人の機敏さと狡智にも缺け
向上の途を辿らうとしない人々
其日其日の生活に浸りきつて
ただ働く、馬車馬的に——。
狭つ苦しい眞暗な採炭個所で
猫脊になり乍ら鶴嘴を振ふことが、
また地熱の中に蒸され乍ら
枠を入れたり支柱をいれることが、
或は坑内にトロツコ押し
それが彼等の總てなのだ。
自覺のない人達ばかりだ
濁酒の酔ひ
花札の魅惑
そして女との燃え上る情炎

それだけ！
因習の良に引かかつて平然と
人生を辿つてゐる人達ばかりだ。
強い情熱の人は居ない
眞理に直面しやうとする人は居ない
平凡と無爲と
そして本能に左右されてゐるばかり。

これら光明のない生活に叛逆の叫びを擧げて
天野五郎は沈滞の空氣を引裂く、
狭い室で、おあきの物憂げな面を眺め乍ら
育くみつづけた思想の蓄積を
今紙へと書きしるす彼。
それは炭坑經營者に對しての建言
また係員達の腐敗した氣魂への憤怒
あらゆる妥協を排して邁進する彼の情熱。

彼の心には愛慾の芽が萎れてゐる、
美しい妻おあきへの愛情も疎い
彼は知つてゐる、

妻の心が自分を離れてゐることを
此懷疑に惱む男を捨てて
情炎の下に身を委ねたことを——
然しいま天野五郎は
總てに黙々として思索しつづける、
憤怒の言葉もなく
嫉妬の苦い汗を吸はふともしない、
叫びかける前の静けさ
自らを深めてゆくただ一つのことに執中する。

おあきの心は暗い
然しその情熱は高らかに烽火をあげ
すべてを打捨てて去る心の用意は
島の女にはつきりとみられる特質
ただその日を、其時を
おづおづと考へつづける彼女の胸裡。
ああ眠れる者の無暴さよ
斷崖上によるめき躍る危さよ！

「おあき、お前あこんどがんとしたとの

今迄んごと優しうなかし
何時も何時も沈んどのの？」

「優しうなかはあんたですたい
晝も夜も
苦か顔して居るぢやつせんか
本を読むもよかですばつて
女房の事あ忘れとる
口惜しかです、悲しかです、
毎日毎日苦しか處で働くのも
皆あんたが可愛か爲
ぢやのにこんごらあ
むづかしか事ばし書いて
女房と一緒に寝たこともなかぢやつせんか」

「そがん事あ言ふな
俺は今苦しかとぞ
俺あ自分がわからんばい、
こんげん苦しか生活と
こんげん壓制うけて働くぢやつか、

俺達あ悪いぢやなかぞ
世間のおきてが間違つとるんばい。
しきたりが腐れとるんばい
そやつを俺あ改めたかぞ！
虐められるなあ俺やお前ばかりぢやなかばい
炭坑んもんも
濱のもんも
皆がじたばたしとるとばい、
俺あそやつを正しくする
そん爲にやお前と別れても
炭坑逐はれても
どがん苦しみでも受ける決心、
おあき、お前はよか暮しの法を考へろ
好か男があつたらゆけ！
俺あ却つて氣樂ばい
嫉いて言ふぢやなかばい
恨むでもなかぞ
俺あお前の幸せを祈るとばい」

嚴肅な面

男子の決心

それは今赤裸々に女の前でのべられる。

おあきは胸躍らして

男から離れるひとつの途に

情焰の魂をひそかに運ぶ、

おおこれは許されない罪悪か？

いや此島では當然すぎる一つの現象

男から男へ

女から女へ

島人等は思ひのままに移つてゆく、

その中で育つたおあき

それを咎めて何としやう。

×

春は深い

鮮やかな新緑の衣は山々をつつみ

潮の香も高い磯濱

漁村にも山家にも

またこの活氣充溢れた炭坑にも

春宵の惱みが流れてくる頃――

山の根に老梅の青葉を茂らした家、
瓢箪池の水は枯れて

芝生には夕闇がしつとりと浸みこんだ庭

炭坑の合宿所はひとつそりとしてゐる、

留守居の老婆がひとり

勝手元に忙しく歩き廻り

數人の晚餐をととのへるのに忙しい。

終業の汽笛はまだ？

汽罐場では火夫が眞赤に顔をほてらし

女夫は懸命に燃料炭を搔上げる、

おおこのあわただしい氣配よ！

坑口の捲揚機は頻繁に運轉をつづけ

採炭課の黒板には

出炭數量の記載が次々と殖えてゆく。

汽笛は鳴つた！

人々は雪崩のやうに

作業場から浴場へ！

また狭い長屋の一室へ！

若い元氣な坑内係や

機械課の技手、檢炭係また三等書記等は

獨身の自由さに軽々と合宿所へ急ぐ、

海のもの、山のもの

それら新鮮な菜の數々に

労働の疲勞を洗ひ落し

食欲をみたすその舌鼓。

炭坑治安維持の警務係は

怠慢の時をこの合宿所に費し

花札の遊びに夜勤の大半をさく吞氣さ、

今宵亦

青芝を踏んで元氣よく訪れる警務係。

「よう、よか相手ばい！

巡視は濟んだかの、さあ

上れ！草鞋をとらんかのう！」

機械係は頓狂の叫びをあげて

新來の敵手を歓迎し

はや晚餐の席をたつて爐端に坐る。

新しい座布團がぐるりと裏返され

磨りきれた花札がばらりとまかれる、

と二人の面に

勝負の緊張さがちらりと影さす、

手やくがついて運命の恵みに微笑む機械係

出來やくの有望さに腹でにつたりする警務係

炭坑の役員らしいこの姿よ、

二人は懸命に勝負事へと熱中する、

そして坑内係や檢炭係も

やがてその仲間に入つてはしやぎ出す。

これは又何といふ幸福な笑聲であらう、

親しみの籠つた憎まれ口

悪口も罵りも甘く胸に應へ

總てを投込んで没頭する花札遊び、

苦痛の生活を忘れ

女の傍に近寄つてゆく汚濁さから脱れ

ひたすらに魂を注ぐ花札遊び。

廳て合宿の室々には若い息吹きが漲り始め

腕押し、足角力、または頸引き
破裂するやうな元氣な笑聲
朴訥と純眞に生きる彼等の性情は
明るく野性の華やかさを以て
春の宵を刻々に逐ふ。

「今晚は、塚田さん……」
柔らかな女の聲は

宵の情緒をかきたてかきたて
喧騒の中にもまれる男達へ！
甘やかな思慕をなげて騒ぎを鎮めた。
玄關に現はれた坑内係塚田の前に
熟れた木の果はおちやうとしてゐる、
妖術の秘められた眼ざし
熟れてはじける唇の色。

「おう、おあき——どがんした？

此頃あちつとも姿をみせんで
患つとるんか、怠けとるんか

俺あ心配してたとばい。」

「そがんぢやなかですばつて

難かしか亭主の側ぢや

仕事する氣にもなれんですたい、

好かん人ん傍に居たつて

のう、面白か事あなし

あんたんとこえと思つて喃」

男から男へ

いま女の魂が流れてゆく。

當然のやうに

すらすらと傾いてゆく熱情のこころ

はや心と心には堅い默契が芽生え出す。

若い女が

若い男を訪れる、

それはこの島では

もう身を許したも同じ

魂を打込んだ擧句だ、

もう女は男のままに左右される、

そして倦きたら

お互が知らぬ顔して別れるばかり。

未練もない

嫉妬もない

享樂の瞬間に生の高潮を認めてゐる彼等、

人間の心の一角にのみ

眼を注ぎ

他を顧みやうとしない冒険者達だ。

おあきは合宿所の奥室に姿を消し

聴て機械係や検炭係は村の娘達を探しに、

また警務係は旨い酒宴の席を探しに、

青芝を踏んで彼方の道に出る。

「塚田君、今夜は歸りが遅かでの

頼むばい！

そうしてのう、おあき

よか事したら奢るんばい」

男等の投げてゆく戯談言葉、

廣い家には

塚田とおあき

婆さんは茶話に出かけた留守の夜。

労働者の妻を奪つて

快く微笑む男

また特權をもつた男へ

胸なげかける女のよろこび。

金錢の爲ではない

情の絆にひかれてか、

いや其處にあるのはただ情炎の渦ばかり

そこに身を焼く

魂の削られてゆく快味にひたる。

天草女と天草男

人間の本能をそのまま

肉慾の淵に

びたびたとひたりきるあくどい生活の相。

地底の暴風雨

歐洲大戦後の恐ろしい衰微の波が

濤々と襲ひかかる東洋の國々

船舶所有者の眼色は變り

貿易商は蒼ざめて額に汗ばむ、

そして炭坑経営者の上にも
凄じい怒濤の沫きがざぶざぶと押かかる。
惨めな人間の力よ！
萎縮した経済界に引廻されて
哀れにも削られてゆくその力よ！
人と人が組立た力に
その人々が押し潰される、
いま島の炭坑にも
此不況といふ素晴らしい強力者が
ぐいぐいと咽喉輪を責めに襲ひかかる。
小さい炭坑は潰れていつた、
そして僅かに大規模の炭坑だけが
呼吸絶えだえに仕事を続ける。

出炭量の増加！
たつたひとつの生命の綱だ、
ああ然し此炭坑も既に老ひた
こちこちの不味い澱があるばかり、
採炭課の懸命な努力も
坑夫等の怯やかされる生活への支柱も

この減少する出炭量が
ほのかにも示す没落への道程か！
断層の出現！

突発的な坑内出水！
爽やかな風吹く初夏に
死物狂ひの炭坑生活者は
緊張した面持と不安の沙絹に包まれて
坑外に、坑内に
必死の労働をつづけてゆく。

魔手！、遂に、遂に黒衣の魔は現れた、
本卸堀進の前途に横たはる大断層
測量係の計算書は
十八度傾斜で三十間堀進の大断層を報告する。
また坑内出水の量は多く
九片には四十馬力のタービンポンプが三臺も
揚水管を揃へて
晝夜繼續の排水運轉
その日その日の出炭量は
汽罐場で焚く燃料炭と同じ量だ。

生命がぢりぢりと焼け始める、
手當の術は？

救助の法は？
視よ二千餘の生命が不安に包まれて暗い面持。
人々は必死の努力をした。

大断層は日々に堀進され
ダイナマイトは頻繁に爆裂し
坑外に現はれる炭車は總て岩石の満載！

坑内はよろめく姿だ、
通氣が停滞し
瓦斯は處々の採炭個所に濃厚となる、
恐ろしい爆發の豫感が湧いて
坑夫等は全身の注意力を惡瓦斯集積の切羽に
注意

掘れるだけ、精も根も盡きる迄
眞黒になつて掘る石炭の層。

天野五郎は其屈強な肉體を
大断層堀進の難處へと現はしてゐた、

手金と節力

力の火花！

地熱は吸血鬼のやうに坑夫等の汗を吸ひ出し
十分間の作業も出来ない惨虐な熱度、
一本のダイナマイトをしかける爲に
頑強な坑夫達が交代にする穿孔作業！
疲れ果てると九片の捲立迄這ひ上り
僅かに冷氣を持つた空氣の中に身を横たへる、
そして夢現の境にきく坑道爆破の音響。
汗は人間の力を奪ひ
天野五郎は朦朧とした意識の中に
自分を捨てた女を思ひ
また今悶え狂つてゐる坑夫等を思ふ。

大地の古い建設當時
ここに秘められたあらゆる地層の變化
今その神祕に對して人力の挑戦が始つたのだ。
坑内に醸し出された必死の争闘
彼はその中に黙々と考へる。

俺は女と別れたのだ、
自ら宣言した其夜のこと
俺には力強い抱負があつた、
女と別れ、自分ひとりで行ふ壯舉
それを思ふ存分仕遂げてやる望み！
あ然し此惨めな姿はどうだ、
暴壓者の炭坑ではなくなつた、
弱いもの、病める姿のいぢらしさ
哀れみを乞ふてゐる炭坑ではないか、
叩き潰せない
俺はこれを護らねばならない
この炭坑ひとつで生きてゐる二千の人々
その怯やかされる心を
平安の住家に呼戻し
壓制者の魂を洗つてやる！
さうだ！其處に俺の光りが生れる！
さうだ！さうだ！
社會への不満を叫びかける前
先づ彼等を救つてやるんだ！
去つた女に未練はない

奪つた男も憎くはない
人の心を
どうして俺があれこれ言へやう。
此島の因習が
此島の風土が
さうだ！自然と人間とが一緒になつて
新らしく生れてくる人間を捲込んで了ふのだ！
俺は起つ！
彼等を眞先に救はねばならない！
いま天野五郎は
深々と瞑想へ溺れてゆく——と
近く本卸詰めで岩層爆破の大音響！
×
掘進された斷層は十間！
炭坑の人々は此成功に祈願を籠め
總ての話題は斷層に集まる
ここさへ抜けば
豊かな大炭層が出現する！

華な歡喜の世界！
陰鬱な炭坑も甦へるだらう、
忌はしい過去の思ひ出を大洋に投込み
芝居小屋の一つも出來やう。

目覺ましい事だ！
人々は始めて明るい世界を想像する、
心の眼がばつちりする、
自分を忘れて他を思ふ愛情に觸れてくる、
全山の心は一つ！
大きい團結の力は初夏の空にうなりをたて
眞暗な地底には必死の努力！
排水、掘進、そして上部坑道の採炭！
嗚呼、然し巡りくる禍ひの黒い姿よ！
それは今午後二時の排氣坑に現はれる。
見よ！十吋スチーム管を吊上げた大柱は
今めりめりと音たてて碎ける、
恐ろしい地壓だ！
炭柱が次第に拂はれて増大した炭坑の地壓

そして今六片下排氣坑の大柱は碎け
烈しい爆裂！ スチーム管の大破裂！
天井の落磬は排氣坑を埋め、
六片以下は通氣の停滯！
はや本卸詰は水に埋まる、
七片のポンプは二臺とも運轉を休止し
坑内水は滔々と奔流をつくつて八片へと落下
する
おお、坑内の大騒亂！
坑夫等は驚怖の魔に憑かれて飛び上り
坑外に報じられた大變災！
八片のポンプも停止、また九片も
そして最下底に運轉してゐたウォーシントン
ポンプは水没する、
動亂だ！叫喚だ！
地底には凄じい暴風雨が捲起つた。
坑夫長屋で昨夜の疲勞を
熟睡の中に忘れかけてゐた坑夫達！
それらの人々は飛起きさまに坑口へと驅

けつける、

非常警戒！

ポンプ引揚げ！

鐵管取外しとレールの徹廢！

迅速な七片以下徹退作業の命は下る。

職工達はスパナやハンマーを携へてあわた

だしい入坑

八片のパイプ外しだ、

また水没ポンプの解體作業

炭車はそれら巨獸のやうな粉炭まみれの機械

を運び出す、焦燥の坑外へ！

坑内水は凄じく本卸詰から九片へと充滿し

今半ば解体されたタービンポンプを埋めかか

つた、

疲れきつた坑内係の激勵に

坑夫等は直面した絶望の中に必死の働き

おお何といふ眞剣な姿だらう。

人間か！機械か！

恐ろしい昂奮の渦巻だ！

ただ力！

慣性！

絶対服従！

迅速な作業の進展！

「あと二本だ！

ボールトが二本だけだ！」

油に汚れた顔を振立てて叫ぶ職工

ああ必死の努力も

狂暴な坑内水の奔流に敗れた。

タービンポンプは水没した！

すぐその水際に

炭車は運搬の任務を果す爲に運ばれてあるのに

誰か此二本のボールトを外す者は居ないか、

人々は絶望の前にまだ光りを求めてゐるのだ！

熟練した職工が二度程

濁水の中にもぐり込んだが

腹一杯にのみこんだ坑内水の爲に

よろめき乍ら這ひ上る。

「駄目だ！駄目だ！

ポンプはやられる！」

お悲痛な叫びよ！

職工達は默念として刻々に増す水嵩をみつめ

「かせスパナをかせせ！」

慄とした叫び！

天野五郎のすつくと立上つた悲壯な姿よ！

素裸の彼は坑内水を目蒐けて飛込んだ、

油と粉炭とそして汚物にみちみちた坑内水の

中で

彼は手探りにポンプの土台を見つけ出し

未だ抜けない二本のボールトに指を觸れる。

スパナをあてて一廻し！

また一廻し！

呼吸は詰まる、

坑内水は鼻孔に嫌厭な臭氣をただよはし

むかついてくる胸の慄ひよ

抜けた！

一本のボールトはとれた！

必死の努力！

他の一本にスパナを嵌めたまま

彼は呼吸つく爲に浮び上る。

だが彼の意識は亂れてゐた

斜坑の中にもぐつてゐる身を忘れ

勢ひよく水を蹴つて浮び上つたその瞬間

水中に埋没した天井枠の一端は

呼吸亂れた彼の脳天に烈しい一撃をくれた、

混亂！狼狽！

がぶりと飲んだ坑内水！

彼の氣は異常に引締つた、

狼狽の姿を整へて再び身を沈め

レール傳ひに這ひ上る呼吸の苦しき、

水面に浮び出たその面には

眼映ゆいばかりの懐中電燈。

「どがんした！

とれたか！」

期待の言葉がふりそそぐ

八片よりの奔流は勢ひ強く

水面は次第に上つてくる、

深々と胸一杯に呼吸ついて
再び水中に姿を隠した天野五郎
その果敢さよ！
みよ！傍観の人々は泪に頬をぬらし
拳は強く汗ばんでゐるではないか。

最後の努力！

最後の一本は完全に除れた！

疲労と苦痛とのどん底に彼は立上る。
よろめき這ひ、再び、水面に浮んだ歡喜の微

笑よ！

「ロープだ、ワイヤーだ！」

がらがらと下げられたワイヤーロープ

「おうきに！きつかつたらう

さあ、今度あ俺がやるで！」

「俺もゆく！」

「俺も！」

唯一人の勇敢な行動に感激した職工達は
思ひ思ひに飛込んでゆく、

そしてポンプは完全に連結され
懸て炭車の半ば埋まつた場所迄引揚げられた。

炭車へのせられ
やがて捲揚げの合圖とともに
ポンプは坑外へと上つてゆく、
地下二千尺の坑道に黙々と見送る彼の眼
安堵と力に張りきつた男性の意氣！

人々はへとへとに疲れてゐる、

今は薄暮か、

それとも夜半か、

ここ地底には夜もなく晝もない、

握飯が炭車の中で

湯氣たて乍ら下つてきた時

人々をはじめて飢えを

腹の奥から感じたす。

×

坑外は今眞黒な不安の渦に卷かれ
電燈の下に炊出しを急ぐ女達！

課長の妻も坑夫の家内も——
日頃の隔ては此處に見られない、
良人を思ふ心、友を思ふ心
そしてただ人間の生命と炭坑の安危を思ひわ
づらう心の數々。

彼女等は平生のだらしなさをかなぐり捨てて
その頑健な體軀を

社宅の並んだ埋立地から

山腹の坑口へと急がしく運び續ける、

眞心の籠つた握飯が

大きい箆の中で湯氣をたて

懸て炭車と共に地底深く滑走してゆく時

彼女等は刻々と悪化してくる坑内の状況を耳
にする。

「どがんなるつちゆうかのう……！」

腹の底から絞り出た不安の叫び！

其中に交つておあきも甲斐々々しく働く、

漁村の實家へ戻つてから

若い坑内係との逢瀬を楽しみ

日毎夜毎の享樂に身を溺らせて

ひたすら思ふはただその男塚田の安否。

彼女は忘れてゐる、

天野五郎を忘れてゐる、

天草女の移り氣が

ここにも鮮やかな閃きをみせてゐる。

夜は更けた！

坑内の混亂はまだおさまらない、

九片の埋没は目焦の急だ！

機械係は懸命の努力と機智を働かす、

六片ポンプ室から本卸入氣坑へと連結された

五寸鐵管は

今敏速に七片へと向つてスチームを送る、

排氣坑の修復は絶望だ！

七片ポンプ室に送られたスチーム管は

喘えぎ喘えぎ乍らもポンプを運轉し

更に八片へと接合されたスチームは

弱々しい響きをたててポンプの運轉、

そして力ない排水作業は開始された。

坑外では素晴らしい天野五郎の勇敢な行爲が
喧傳され

勇壯な男性の意氣に若々しい娘達は恍惚とす
る、

そして……おあきは
胸搔むしる悔恨に打伏す、
この輝やかなしい男性の妻！
その光榮を自ら捨てた情熱を呪ふ。

おらあどがんとしたんか、
自分で自分がわからんばい、
亭主を捨てて情夫んところへ
いつたばつても——ああ矢張り苦るしかたい、
三年一しよに暮したあんひと
あんひとあ別れてしまふ
里にかへつても炭坑に出て
よか男は居やせんたい、
塚田さんはおらあと逢ふのも嫌つとる
それでもよかよ

おらあまたよか男ばみつけるで
ああ、ばつてのう
もとん亭主の男らしか話を訊けば
懐かしかよ、戀しかよ！
許してくれたら
おらあどがんとれしかか……

彼女はいま
魂の烈しい悔恨にのたうちまはり
みづみづしい肉體を悶え惱む。
別れた男の懐かしい姿
その高らかな男性の意氣を
烈しい情熱の中にしみじみとみつめる。

漁村の夜

狂ひ廻つた炭坑は今漸々に鎮まり
人々は僅かな安堵に愁眉を開く。
そして平凡な日が續き
平凡な生活が營まれ

人と人との交渉も目立たなく進んでゆく。

漁村の人々は漁を捨てて炭坑稼ぎ
娘達は粹な坑夫を漁つて夜遊びに忙しい、
そして小さいローマンスが幾つとなく生み出
され
次々と消え、別れ、またいつとはなく一緒に
なる。

あらしのあとの静寂さ
いま炭坑一帯は其中に休息をとる、
もう人々は焦らない、
出炭量も順調だ、
坑内排水も七片上は完全になり
上部炭柱の採掘が今頻りに續けられる。

薄暗い坑夫長屋の一室に
炭坑の「男」天野五郎は寝そべつてゐる。
單純な島人達は
この炭坑の危機を救つた勇敢な男

天野五郎に讃嘆の言葉をそそぎかけた、
彼等は長い墮眠の間に
一人の英雄を待つてゐたのだ、
天草四郎時貞のやうな俊傑を
ただもう無暗にすばぬけて傑い人間を、
それがいま自分達の仲間から
平凡な坑夫の中から出現した歡喜よ！
炭坑の經營者から表彰された天野五郎、
それは彼等を自己満足の絶頂へと引上げ
次々と注ぎかける素朴の讚美！
それは又何といふ皮肉であらう、
みよ！彼の苦悶を！
感情のあらしを！
自らを陥れた思想の渦にもがきつづける彼の
姿を！
おあきと別れたその哀愁
あんなにも確固とした信念の上に立上り乍ら
男を捨てゆく女への宣言
その言葉の何と空虚さよ！
彼は自らの足りない修養を悔ひ

上滑つた感情を悲しむ、
そして獨り寢の焦々しさに身悶える。

俺が生命をかけてやり遂げた仕事は
たつた一枚の表彰状で酬われ
炭坑は相變らずの無智と暴力！
それで従順な坑夫等を絞りつづける、
堪らない姿だ！

いつ迄俺達は虐げられるのか、
光明は！救ひは！

社會は平然としてゐる、見向きもしない
駄目だ！矢張り俺達は自力で起つんだ！
けれどもさうしたら

永久に起つ事は出来まい、出来るといふのか
俺達の仲間が眞理を見つけ出して
それを社會に叫びかける力がいつ與へられる
といふのか。

詰込み主義の教育
それさへ坑夫達の子供はうけられない
義務教育が終らない中に

坑内稼ぎ、日給八十錢の唐箕廻しをやるでは

ないか
貧しいからだ！

生活のわめき聲に怯えてゐるからだ！
皆がそわそわしてゐる、

明日、棺桶の中に這入つたら
同胞よ！お前達の家族はどうなるんだ、
考へる事が怖ろしいのか！

癪に障るのか！
どつちでもない、同胞！

勇敢にぶつつかつてゆかうぢやないか、
俺をみてくれ！
女と別れてやもめ暮し
それでもどうだ、

から意氣地ない貧乏世帯
矢張りお前達は悟つてゐる。
酒と女と勝負事

そこに生甲斐があるんだらう
俺は自分で自らを檻の中に押しこみ
獨り超然と納つてゐるが

矢張りそれは氣紛れなのか！

女と別れて何の楽しみがあらう、
酒を飲まずに何故氣が晴れやう、

一六勝負も氣晴らしだ、

運が向いたら——港の女郎屋へ出かけるに

俺はあの四角張つたひとりよがりの言葉を取消
す、

おあき！戻つてくれ！

抱きしめてくれ！

俺は堪らなく寂しい、苦しい、焦々する

寂しさが心を眞暗に塗りこめてしまふ、

孤獨が此處にも鋭い牙を鳴らさうとは思はな

かつた！

おあき！美しい忘れられないおあき！

この炭坑に

お前程美しい女は居ない、

魂がどんなであらうと

俺はお前の柔らかい肉體が欲しいのだ！
そして奔放な野性の情炎

荒削りの自然のままの美しさが

お前の微笑や、または苦い澁面にまで
豊かに豊かに恵まれてゐる、

戻つてくれ！おあき！

俺は自分を知らなかつた！

俺が餘程偉大な事業を

易々と出来るやうに考へてゐるが——

ああ、此身の程知らず奴め！俺は莫迦の骨頂
だつた。

歪んだ炭坑への叛逆は

俺の心を醒めさせてくれたもの

それさへ矢張り浮ついたもの

まして自分自身の行爲に

救世主の幻影をもつた惨めな俺よ！

俺は坑夫だ！矢張り一人の坑夫なんだ、

一生を眞面目な坑夫で過せばいい、

賽の眼がどんなに出やうと

俺はもう心を動かすまい

眞實に人生を歩む

それでもう充分だ、
煩惱の毘に引掛つた過去を

潔ぎよく天草灘の海底へと沈めやう！

×

潮の香高い夏がきた、
海の色は凄いで程蒼く
島人らの生活は物倦くのびきつてしまふ。
切立つた絶壁には
大灘の沫が鷗と戯れ、
古生代の岩層はあらゆる自然の祕戯に
黙々と身を委ねてゐる壮大な風貌。

魚貫崎の尖端には
頼山陽の魂を奪つた風光が
永劫の力をたたえて大海に直面し、
小さい海邊のうねり
その海岸線は魚貫港へとつづいてゆく、
其處には漁船が碇泊し
また石炭輸送の帆前船が
キールの先端におしめを翻へして
陽気な人生の相をみせる、

のどかな漁村

眠つてゐるやうな悠久さを以て
ここ魚貫村の人々は生活する。
村人等の生活は原始的だ、
白米を磨ぐことは珍しい程
毎日毎日甘薯ばかりで生きてゆく
魚の腸を塩辛にして
それがお茶

その生活を悠々として楽しむ一日よ！
日向に汗ばみ
木蔭に午睡、
また海に躍りこんで鮮やかな拔手、
夕陽が落ちると
村には一日の疲勞を忘れる談笑の集ひが
薄暗い電燈の下や
濱に上げられた漁船の腹下で
明るく、激しく、
情慾的な執拗さで続けられるのだ。
今夕闇をせかせかと掻き亂し乍ら

丘の上に現はれた男

心の悶えを漁村の熟睡へと運ぶ姿、
天野五郎は丘上に立つ。
大灘の彼方は既に水平線を失つて了つた、
岬も島嶼も姿を消して
ただ眼下なる漁村の灯、
それは點々と、濱にまたスロープに
夏の夜の情緒を生み出してゐる。
彼は漁村へと小徑を下る
そして海邊の貝殻道を
せかせかと急ぐその先に
船宿の灯がなまめかしい。
宿には大勢の若者がごろごろして
娘達のしなさだめ、
幾人の娘を得たかといふ問ひに
お互ひは誇らしく娘の數を擧げてゆく。
かうして男達の噂に上る娘達は
聽て南洋の島々に
また南支那の港々に
娘子軍の一員として海を渡る、

再びこの島に戻る時

彼女等は家を建て土藏を殖やし
得々と嫁入つてゆく珍しい風習を次々と織
りのこすのだ。
ここにきて處女の尊さを説く者の愚かさよ！
ここ漁村の人々には
その尊さや誇りはわからない、
男を知らない娘達には
いい嫁入りが出来ないといふ島ではないか、
かうした娘達の間
出戻りのおあきは交つてゐる、
それは此宿でも話題の中心となり
若者等は彼女に近づく術を考へ、競ひ
どうかして、どうかして、
あの熟れきつた肉体を！
若者達が話しに興じてゐるその場所に
おあきの先夫、天野五郎は這入つて來た。
「どがんとするかの
あんたん事あ皆褒めとるばい
炭坑からあうんと褒美があつたらもん」

「全くばい」

學校ん先生までが

修身の時間にあんたん事ば話したつちゆうぞ

子供らあ、あんたん事ば

傑か人間て言つとるばい」

「若か女子達あ

みんなあんたに惚れとるばい」

「よか女子を世話しよか

男あよし、腕はあるし

鬼に金棒

うらやましかのう」

寝そべつた若者達の讚辭、美望、

けれども天野五郎は寂しく笑ひかへす。

自分自身の魂がかつれてゐる

若い女の柔らかい肌の匂ひ

その惑溺への願望にみちみちた身が

余りにもかけはなれた讚辭で包みこまれた皮肉

の痛み。

「俺あそがん男ぢやなかとばい

みんなん仲間入りしてのう

面白か夜ば過したかよ、

酒でも飲んで

女子んそこへ忍ばぢやのう。」

若者達は急に明るく

粗奔な歡聲をあげて心をよせる、

そして天野五郎の投げ出した財布をもつて

一人の若者は戸外へと走り出た。

酒が、鹽辛が、

聽て此若者達を陽氣にして

破れ聲の唄、野性の叫びが

本能の彷徨につれて湧きかへる。

「おあきは此頃どがんとるかの

みんなん衆は知つとるけ？

俺あ莫迦みたよ、

あん女にや別れたかなかに

どがん魔がさしてかあの頃あ

優しか言葉もかけた事あなし

一緒に寝たこともなかつたでの

若か女子さ

それが辛かで出たとばい。

きいてくれ、みんなん衆

俺あ酔つて喋るぢやなかぞ

正氣ばい、よかかの、

炭坑ん爲に生命がけの働きも

たつた一枚の紙切れ——

暮しが樂になるぢやなし

小頭に採用されるでもなかつたばい、

矢張り坑夫、石炭掘りよ

それもよかたい、ばつてのう

炭坑んもんの苦るしか暮し

虐められ、打のめされ

それでも黙つて働いてゐる坑夫達

それが俺あいぢらしかよ！

哀れんなるたい

そやつをどがんか改めて

ちつたあ皆ん爲になりや

女子と別れても

炭坑逐はれても

清々して暮せるぢやつか。

そればつかしに

精一杯、根一杯の仕事もすりや

可愛か女房とも別れたとばい、

ぢやがのう、今ぢや悔んどる

おあきと別れたなあ悪かつた

寂しかよ、頼りなかよ、

俺あ堪らなくて今夜

逢ひにこつそりきたとばい、

みんなん衆、嗤はないできいてくれ！

全くばい、今夜どがんことしても

おあきんとこへ行かなきやのう——」

男の心がそくそくと眞情にもえる時——

愛慾の淵に悩む者よ！

若者らは感動して盃をあげ

その快い酔ひに足亂し乍ら

戸外に——村の娘達を漁りに

思ひ思ひに宿を出る。

彼も其中に擁されてよろよろと歩む彼女のも

とへ！
あの熟れきつた女のもとへ！

×

濱は眠る
静かに静かに漁船の灯が
音を失つた波間に碎ける、
ひとりぼつちのランターンに
夜風がこつそり寄つてくる。
未明の出帆に用意整へた船員らは
そのままごろりと胴の間に雑魚寝。
夜は更ける、——漁村は眠る
もう灯はなくなつた、
宿の冷たい床の上には
若い男女達のぐつたりした××
闇にさぐるはただ情熱の腕と腕。

この静謐な深更の濱を
びつたりと寄り添つて歩む男女
天野五郎とおあきの囁き

ふたりの間はしつくりと融けあひ
再び結ばれたその祝福に
ふたりは恍惚と濱を歩む。

深更の濱——海は沈黙の畏怖を
ひたひたと打寄せる波にたえる
夏の夜の海——そこは神祕の幻想の母胎
不圖死の幻想が過つた天野五郎のみたされた
心。

「おあき、そんな儘歸つてもよかかの
ことわらんでも心配せんぢやるか」
「よかです、よかです、
あんたるところへ歸るぢやつせんか
亭主んそこへゆくですもん
よかですたい、かまはんですたい
夜道は寂しかで、のう、
舟で、うちん傳馬船で——」

神祕な夜だ！

燐の碎ける海だ！
星もない夜空、その下で
眞黒な山の出鼻を廻つてゆく舟、
櫓の軌る音、やすらかな呼吸、
それらよろこびの男女をのせて舟はゆく。

聽て炭坑の火力発電所、その煌々とした光
りが現はれ
また社宅の街燈がずらりと竝んで潮に碎ける、
この静謐よ！
びつたりと魂のあつた二人は漕ぐ手を休めて、
波のまにまに、心のまに——

「おあき、よか夜ばいのう
こんままぢいつとしてゐたかばい
いつ迄も、いつ迄も——
こん海ん中にあ
奇麗かお城があるやうばい
俺達が苦しまずにも住むところが
こん海ん中にあるやうばい」

「そがんこと——あんたあ、夢みとる、
どがん苦しくとも
悲しかことあいくらあつても
生きとるがよかですたい
あんたあ炭坑ん爲に、またみんなん爲に
確りせにやならんぢやつせんか」

「さうぢやのう
どがん事あつても碎けちやならぬ、
俺あ屹度やつてみせる
お前がやさしくしてくれりや
嬉しかよ、心おきなくつくせりたい」

舟は流れる
満潮にのつて棧橋へ——
確りと抱きあつたお互ひの魂に
烈しい接吻をおくる男女をのせて——

海邊の處女

深緑の山にわけ入り——

或ひは、小さい灣に櫓をこいで
人々は恵まれた一日の公休日を享樂する、
山神社のほとりには汗拭ふ年寄の坑夫夫婦が
ひたすらに捧げる祈願。
炭坑の汚ない小料理屋は
朝から三絃と歌聲につつまれる。

山里には、いま

静かな氣配と享樂に自己を忘れる突き詰めた
相がみちてゐる、

だが、みよ、海岸の華やかな遊歩を！

いつも奥まつた社宅の中で

滅多に顔を見せた事のない娘達まで

漁村の野性にみちみちた娘達と語り合ひ

母親達の微笑をあび乍ら

爽快な拔手をきつて泳ぐではないか。

若い坑夫達も

爽やかな夏の海邊に集ひより

社員の美しい妻君や

娘達の豊饒な青春に見惚れてゐる。

自分等よりもぐつと「偉いひと」の

その奥さん達をみる事が

彼等地底の生活者には

大きい驚異と歡喜とをもたらす、

砂濱に座して

その艶麗な女達の戯れを眺め

うつとりと、みしらぬ國を幻に描く。

所長吉本の娘、淑子は

過去の明るい學生時代に追憶の想ひをさせて

いま人々の群に交つて鮮やかな泳ぎ、

二十歳の夏――

島の炭坑に青春の日を悩む處女にとつては

この自然にのびのびと戯れる享樂は此上もな

い悦びだ、

彼女はしらすしらす沖に出る、

人々の群から離れ

鮮やかな拔手や脊のし。

古風な港、長崎の鼠島で

彼女は夏毎の烈しい水泳練習

そして四年間の素晴らしい上達は

天草灘の横斷をさへ夢に見たのだ。

その強い自信と練磨のフォームは

今荒浪よせる沖合へと彼女を進める。

波の戯れに身を委ね

照りつける陽ざしを眼ばゆくそつと受け

勢ひよくきつた水、潮の快い音律よ！

すい、すい、と身は進む

水中で綾をくむ健康な兩脚のリズム！

おお、渺々たる大洋の一點よ！

豊醇な處女がのりきる大波のうねりよ！

漁村の濱では

泳ぎに疲れた女達が焼けきつた砂上に轉びね

無駄口に華やかな笑聲をたてる、

そして自分達の周圍に

際立つて美しい稟性の豊かな處女

淑子の姿を探しもとめるが

叫んでも！

探しても！

彼女の引締つた面の輝やきは見えなかつた。

海だ！ 沖だ！

まだ泳いでゐるのかしら、

脂肪肥りのした吉本夫人は眞先に顔色かへて

不安と不吉な豫感の錯綜した苦悶に陥る。

人々は濱を駆け出した、

若い坑夫達ののんびりとした恍惚さも

くるりと引繰り返されてあわただしいどよめき

そして此罪のない傍觀者達は

忽ち海中目菟て飛込んでゆく。

淑子の張りきつた肉体にも疲勞はきた、

快いリズムが亂れ始め

不圖振返つた濱のすがたは余りに遠い、

不安の影がさしてくる

亂れた呼吸は更に亂れ

はや混亂の渦をさへ捲起す、

蒼い海は益々蒼く

陽はかつかつと照りつけて……。

濱までは遠い

岬の巖頭が波に碎けるあたり

そこまでは僅かの努力で

彼女は達する事が出来るだらう。

余りにも乗出した無暴さよ!

人生の波をうかうかと泳いだひとの

自らの陥つてもがく不安と悔恨の淵。

美しい處女淑子の魂は微かに慄える、

考へた事もない恐ろしい豫感は足の先から

健康な肉体の隅々に迄つたはつてゆく……

波をかぶり

潮をのみ

亂れた呼吸をととのへるひまもなく

彼女の疲れきつた手足は烈しく水を搔く。

其儘ぐつと兩手を高くのばして

蒼い蒼い水底へ!

純白な處女の肉体が沈んでいつたら

彼女は龍宮の姫ともならう。

海邊には人々の馳せ交ふ姿

不安と危惧は

焼け縮れた砂々にまでにじみこむ、

海に飛込んだ若者達の

努力は酬はれるのか

ただ焦燥の渦がはげしい。

其時人々を押分けて現れた男

天野五郎の裸体姿!

「おつ!天野さん!

今所長のお嬢さんが

沖へのり出したままかへらんですばい

若え者が出たですばつて

のう、あんたん力のみつけて貰はにや」

村人の一人が叫んだ。

おろおろ聲の吉本夫人は

引吊つた面を慄はしての哀願。

處女の生命が失はれやうとしてゐる!

彼は首肯して其まま海中へと飛込み

若者らの泳ぎ姿を逐ひ乍ら

やがて濱近く碇泊した帆船へと辿りつく、

「傳馬船をかりるでう!」

「よか!」

船中からは日に焼けた船頭の濁聲。

船尾の綱は解かれた!

飛のつた彼の力漕!

舟は進む、渺々たる沖合目蒐けて、

そしてまもなく若者達の泳ぎ廻る間をぬけて

岬の突端へと漕いでゆく、

汗と潮風!

疲労と希望!

天野五郎は全身をあげて力漕また力漕!

仰向けに体を浮べ

深々と呼吸をつく——陽の直射

彼女は瞑目して休息をとる、

波が時々顔をこし

はつと身をもがいては潮をのむ。

聽て淑子は拔手をきつた!

彼方の巖頭を目蒐けて!

處女の肉体は必死と泳ぐ。

洋々たる大海!

其中に波を征服して進む處女

張りきつた心を更に引締め

大波にのつて其まま巖頭のほとりへ

白い白い玲瓏の肌を打寄せる。

ざざざと波のひく時

彼女はニムフのやうに軽々と飛上り

紫色の海水着がびつたりと肌について

肉体の美が際立つてくる

此時海は讚歎の叫びをあげ

巖頭には潮風の禮讚

忍従の松が快いリズムをかきたてる、

巖頭の處女!

それはローレライの奇しい幻か、

いや現代の若い女性だ!

新らしい女性、好ましい心情の持主。

この氣高い淨化の姿よ!

自然は悠々と彼女をつつみ
陽は燦々と豊満な處女美の上にふりそそぐ。

海面の神秘さが
犇々と淑子の心をつつみこむ、
空恐ろしい女性の畏怖が湧上る、
そして不圖見渡した海原に
一艘の傳馬、逞ましい男の漕ぎ手。

女はみた！
男もみた！

ローレライの魔女にも似て美しい處女の魅惑！
はつ！として

櫓を手放した男の放心よ！

おおこれはまた何といふ壯嚴なラブシーンで

あらう、

雄大な天草灘と

奇勝の絶壁をバツクにして男性と女性が

あひみる瞬間の神秘な力。

男も知らない！
女も知らない！
けれどこれはまたとなく素晴らしいラブシー
ンだ！

情花ひらく

かつかつと苦悶の熱を吐く
灼熱の大地、

そこに純情な心の激動に苦しむ男。

天野五郎が淑子を救けて

吉本夫人の感謝と人々の美望を浴びてから

まだ四五日しか経つてゐないのに

彼は苦しんでゐる、

心の底に解けきれぬ塊りが

びつたりとついて離れない惱ましさを。

働いてゐても

ぢつとしてゐても

秘密の吐息が洩れてくる、

遣瀨ない吐息の連続が心を痛め
言ひ知れぬ悩みを明瞭りと感じ出す。

彼は明瞭りと感じた

これが戀だ！と

おおこの素朴な男の

愛戀にみちみちた胸は

明るい近代的な處女の心に

何を言はふとし

何を願はふとするのか。

夕暮になると

山合ひの部落には涼しい海風が吹渡る

粘つた苦惱から脱れやうとする人々が

ぞろぞろと濱邊の方へぞろぞろ歩き

そして炭坑の倶楽部前は

それら夕涼みの人々に充され

黒い影が

いくつとなく纏れ合つては田圃續きの山沿道を
または漁村への険しい坂を、

夜の愉樂に心魅されて歩んでゆく。
天野五郎も倶楽部前のベンチに
燃え上る胸の炎を凝視めたまま
埋立地の社宅から流れてくる風に
甘めてもの涼味を得んと蹲る。
社宅からは人々が涼を逐ふて
倶楽部の露台へと上つてゆく、
男の影、女の影、
その中を漁り廻る彼の眼ざし。

ああこれが戀か

戀とは此處に苦しいものか

俺は少しも知らなかつた、

一目あひたい、

一こと話したい、

たつたこれだけの希ひで苦しむ事が

——これを戀といふのだらうか。

あの明るい瞳

あの純潔な神々しい顔

汚れないものの美しさだ、
俺はあのひとを想つてゐる、
想ふだけ

それで終つてしまふことが、
ああ堪らない苦しさだ、

ひとことでもいい
ひと目でもいい

逢つて清らかな聲をききたい、
あの日、——傳馬船に乗せて

漕ぎ乍ら凝然と見詰めた襟脚の美しさ、
耳の根元から頸筋へかけての淨らかさ！

あそこだ！
あそこにあのひとの魂はゐるんだ！

高い高い魂の住居だ！
俺は毎晩あの襟脚の夢をみる、

けれ共一度だつて穢はしい思ひを抱いた事は
ない。

俺の心が淨まつてゆくやうだ、
あのひとの事を幻に描くその時
きまつて魂は澄んでゆく、

せめて一目

俺の苦惱を解いてくれる姿に逢ひ
そして玲瓏とした言葉の味が

いつ迄もいつ迄も香りを失はないで俺の魂を
びつたりと護つてくれたら

俺はそれだけで満足する
此苦惱から脱れてゆける。

天野五郎の魂は

自らの淨化を戀愛に求める、
そして頭を掻き抱き蹲つた背後に

浴衣がけの吉本夫人が
につこりと立つてゐるのにさへ氣づかない。

「天野さん、
何を其處に考へてゐるんです、

お遊びにいらつしやればいいのに
淑子もお禮を言ひたいと待つてゐますよ」

愕いて立上つた彼の面は
闇の中にかつかつと赤くなる。

ぶらりと下げた両手

ぢいつと夫人を見詰める眼
黙想が破れて

烈しい現實の進展が
どつきどつきと鼓動を速める。

「蒸しますでの
涼みに出て來ましたのですばい」

「お寄りなさい
ね、宅も割合涼しいですよ
淑子も喜びませう

何時も口癖にあなたの事を
お噂してゐるんですから——」

肥満した夫人の後から
烈しい動悸をぢつと押へて彼は歩む、

混乱した心を調へやうと焦り乍ら
がつしりした体を左右に揺振つてついでゆく。

所長の家には潮風が
簾をこして流れてゐた。

電燈も明るく

疊も明るい

ごてごてした坑夫長屋から此處に來てみると
その整つた家具類の中にさへ清淨さが溢れる。

椽近い場所に招かれた天野五郎は
床の投花に優しい心根を偲び

掛けられた墨繪の軸に所長の人格を思ふ、
所長は俱樂部に出かけて不在

あの温顔に薄髭を短く刈つて
事務所の一室に事務をみてゆく所長
嘗てはその温顔に烈しい憤怒の眼ざしを投げ

つけ
また爆發的な叫びをさへかけたのではないか、
彼はいま泌々と人間の心を考へる

利己的な自己を殺るさうと努め乍ら——
向ふみづの輕卒な自分を見出す。

人の氣配に振返つた彼の眼は
おどおどとたぢろいで疊をすべる、

派手な浴衣に
若々しい香りをこめて

冷えきつた麥湯を持つた淑子の姿、

まろらかな微笑の中に差出し
そして一膝ひざ

下つたままその美しい頸筋を下げる。

「先日はお蔭様で

恐ろしいめにも逢はずに済みました、

お禮を申上げやうと思ひ乍らも

本當に失禮致しまして」

「いいえ、いいえ、

そがんことあ……

何に、わたしあそがん言はれちや

全く、全く困りますばい」

彼の言葉は慄え

女の眼を怖れるやうに眼を伏せた、

そしてしなやかな

眞白い指先をそつとみる。

「あなたの事で、父から

いろいろお話を伺ひましたわ、

本當にきびきびしていらつしやる

さつぱりしたお心が嬉しう御座います。

何卒、ごゆつくり……

ここは思つたより涼しう御座いますね、

さあ、何卒、麥湯でも……」

如才ない吉本夫人が出てくると

堅く結ばれた彼の心もするする解けて

涼風に、團扇動かし、いろいろな物語。

淑子は少しも逡巡することなく

思つた事をすばすばと話題にし

坑夫達の生活を

地下の勞働状態を

深い興味と驚異をもつて訊ねきく。

天野五郎は麗はしい處女の言葉に

冷えかけた社會への激しい情熱パッションを呼び起し

訥々と物語る言葉は次第に熱してくる、

そして雄辯に

虐げられた人々の姿を次々と語り

自らの抱負をさへ述べたてる熱情！

夫人はお座なりに首肯してくれるが

淑子の眼は怖ろしく熱して赤い、

坑内の状況を熱して語る天野五郎

またそれに火花を發する淑子の傾聽、
純情な心と心に
感じ合つて鋭く光る焦點がひとつ。

「まあ、其處に怖ろしい仕事なのでせうか

わたし達は炭坑に居乍ら

表面表面の平和より外知りませんでした。

時々變事が起つても

けろりと忘れられて人々は働くのですもの

そんな處とは知りませんでしたわ、

生命懸けの仕事ななさる人達は

馳馳て安穩な生活が出来るでせう、

貯めたお金で地面を買ひ

または小さい店などを出して

過去の思ひ出話に耽り乍ら幸福な老境を過せ

ることですらう」

「いいえ、いいえ、

わたし等あ一生かかつててもそがん事あ出來ま

つせんたい

仕事あいくら辛くとも

賃銀が少しばかりよくなつても

小金を貯める事などあ出來ませんたい、

病氣する事もあるですばい

怪我してやすむ事もあるですばい

そがん時あ金はとれずに費る一方

少しばかりの貯金などあ水の泡

それで炭坑稼稼ぎをするやうな者あ

眞面目に世渡りなど考へませんたい。

面白く、可笑しく

氣隨氣儘に日を暮し

金がとれりや

港の町へ遊びにゆき、

また賭事ですつちまひ

何時までたつても貧乏世帯

年寄つて、体が弱つて

しまひにあ汚なか蒲團蒲團にくるまつたまんま

親身の看護看護もなく

死んでゆくのが多かです」

淑子は始めて眼を開く

此處陰慘な生活相があつたのかと——

餘りにも美しく人生をみてきた處女は
深々と暗黒の流れに眼を注ぐ。

×

幸福の思ひに包まれた天野五郎が
所長吉本の家を辭する時、
淑子はたつて自分の机から
薔薇の刺繡をした手巾ハンカチを取出し
天野五郎への禮ごころ、

「つまりませんもの
わたしの拵へたものですからお使い下さい
あなたへの感謝を
この貧しい贈物でゆるして下さいね」

しなやかな女の手から
その輝いた淨い瞳を
ちいつと見詰めたまま彼は受取る。
そして深い感謝と歡びの思ひでみたされ
山合ひの部屋へと濶歩する天野五郎。
ハンカチをちいつと肌はだかに抱きしめ

言ひ知れぬ感動に荒削の民謡たがひうたを唄つてゆく。

炭坑

地獄の一丁目
ばつてよかたい
女子あ居るし
酒と賽ころあ
憂さ晴らし。

彼は堪らない感激に押し流される、
眞黒に迫つた山と山との姿を仰ぎ乍ら
野性の奔放さで「女坑夫おとこやま」の唄をうたふ。

暗い坑内で

後山唄ふ

すれた唄聲

なげ出す女子あ

石炭いしづんによごれた

太股おまたなでる

炭坑後山年若い。

戀も吝氣も

忘れてゐたと

若い後山唄つづければ

鶴嘴片手の

父親坑夫

闇にほろりと

一しづく。

あたら盛りの

年頃娘

坑内稼ぎに

からだはいたみ

窪む兩頬

蒼い顔

父親そとみてまた泪。

彼は自らの唄に地底の姿を描き出し
はつ：として美しい幻へと心を向ける。
耳のつけ根から頸筋へかけての美しさ

咽喉佛の柔らかい線

そして引しまつた唇と高貴な鼻

そのきゆつとした顔面からくる活々しさ

淑子の高雅な姿が浮ぶ、

山合ひの道に

その幻影はすたすと歩いてゆく。

情慾的な島の娘をみて來た眼には

この余りにも高い氣品の若い女性が

ただ驚歎と讚美の中にみいだされる。

彼は闇の中に微笑む、

ちいつと握りしめたハンカチを取出して顔に

あてる。

處女の香氣

移り香の床しさ

さらさらと快い手觸りに恍惚とする幸よ！

おあきはもう安らかな寢息をたてて

隆起した胸を半分も乗出したまま

たんぜん、を腹に搔上げて兩股をのばしてゐる、

男を完全に捉へ得たよろこび！
彼女は日も夜も
そわそわとして男の機嫌をとり
自らの媚と情熱を注ぎかける。
天野五郎の戻つたのも知らずに
情熱の女はすやすやと眠つてゐる、
あぶらぎつた顔には
白粉のぶちがべとりと濃い、
彼は昂つた心を押へ
純情な女性からの贈物に微笑みかけ
そつと手文庫に収めて電燈を消した。

快い臥床だ！
苦しみの壺は傾けられて
幸福の泉がまんまんとあふれる、
おおその豫感で一杯になり
暗い中で
女のぼんやりと白い顔を眺め
そこに淑子の高い心情としとやかな幻をおく、
喜ばしい妄想が湧き上る、

豊麗な女性が微笑みかけ
しなやかに両腕をさし出してくる愛情、
彼は理性を失つた！
空想の虜となつて昂奮する。

おおきの両腕をそつと擡げ
自分の頸にまきつかせる、
それは力なく
感激なく
ぐつたりと捲かれてはゐるもの
彼はそこに柔らかない感觸と
美しい幻影の誘惑に
愕いておおきの眼を覺ます程抱きしめた。

「おお魂消たですばい、
どがんとしたとですな
そがんきつくしめちや
痛かですたい、
まあ、あんたあ
今晚あどがんかしとる」

おおきは良人の頸から手を解いて
汗ばんだ鬢のあたりを掻き上げた。
彼は昂つてゐる、
おおきの言葉も柔らかに愛情深く
愛慾の渦にまきこまれる兆——

やがてぐつたりと疲労の中に
睡眠をむさぼるふたり。
坑夫長屋は深みゆく夜に身を沈め
遠く潮風につれて捲揚機の音が漂よふ。

戀するもの、嫁ぎゆくもの

朝の光りが臆て灼熱の烈光とかはり
大地は喘えぎ續け乍らも夕闇の訪れを待つ。
坑内に下りてゆく天野五郎の胸中にも
夕闇を待つ劇しい戀情。

夜ともなれば

またあの倶楽部前に
夕涼みと片戀の忍び音に酔へるのだ。
昨夕のやうな思ひがけぬ幸せが
今夜も亦……
おお俺は力一杯に働かう、
それを樂しみに今日はひとつ
思ひつきり石炭を掘り出してやらう。

彼は元氣一杯に下りてゆく、
左三片十四昇の採炭箇所
通氣停滯の最難箇所
言ひ知れぬ力にみたされた彼の体は
軽々と、素裸のまま狹隘の昇りを這ひ上る、
おお安全燈と鶴嘴と
瓦斯体の蓄積に冷氣を覺える昇り詰め。
そこは二三日前若い測量係が
瓦斯の爲に倒れた場所、
馴れない者には瞬時も居られない有害な場所
だ、けれ共、彼は平然と鶴嘴をふるふ、
ざつく、ざつく、

黒光りの石炭！
それらが坑道さして顛落する素晴らしい
労働が始まる。

彼の作業は元氣一杯に續けられ
はや、晝迄に一日の出炭量は出したへた。
そして午後二時迄の絶間ない奮闘は
二日分の出炭量を坑外に示現する、

「どがんとしたか

氣狂ひのやうに掘るぢやつか

炭坑ん壽命が縮まるばい」

坑口の檢炭係は愕いて

十四昇採炭票を記入し乍ら獨言ちる。

天野五郎は愉快さで一杯だ！

此様に烈しい労働も快い遊樂と變りないよろ

こび

おお戀とは

こんなにも男を奮ひたせるものだらうか。

夕闇がすつかり炭坑を包んでしまつた時
彼はいそいそと歩いてゆく、

濱邊の方に

埋立地の廣場をさして――

其處には幸福の花園があり

目に見えぬ甘い流れが彼を恍惚に誘ひ

疲勞も苦痛も

皆洗ひ落してくれる快さ！

彼は昨夜と同じベンチに腰下ろし

慄える胸を抱きしめ

耳をすまして

社宅の方に氣を配る。

あの氣高い淑子さんは

俺に感謝の言葉を呉れた。

そして贈物さへ

自らの意匠をそへて呉れたではないか、

あのひとを戀する事が

どうして僭越な事であらう

また此戀が

空しく消えて了ふとしても

俺は構はない、片戀で終つてもいい

あのひとの聲をきき

あのひとの眼をみつめ

心を淨らかに澄ましてゆけたら

それで充分だ！

今夜も亦

あのひとは俺に言葉をかけてくれるだらうか。

彼は楽しい幻想の中に蹲る、

潮風が、肌の汗を拭つてゆく氣持よさ、

海は黒い、

山も黒い、

岩壁近くの電燈は波に碎け

所長の家からはまろらかな琴の音が

夏の夜の情緒をかきたてて、男性の戀情をそ

そりたてる。

「何ばし考へとるの？

夕闇がすつかり炭坑を包んでしまつた時
彼はいそいそと歩いてゆく、

濱邊の方に

埋立地の廣場をさして――

其處には幸福の花園があり

目に見えぬ甘い流れが彼を恍惚に誘ひ

疲勞も苦痛も

皆洗ひ落してくれる快さ！

彼は昨夜と同じベンチに腰下ろし

慄える胸を抱きしめ

耳をすまして

社宅の方に氣を配る。

あの氣高い淑子さんは

俺に感謝の言葉を呉れた。

そして贈物さへ

自らの意匠をそへて呉れたではないか、

あのひとを戀する事が

どうして僭越な事であらう

何處へ行くのかと思へば

こがん處へきて考へとる、

たまにや一杯のむのもよかですに

こんごらあ、書籍よむ事もせんぢやつせん

か

いつの間に來たか、おあきの眼

ぢいつと見詰める天野五郎の愁ひ顔。

「体ばし悪かの？

元氣がなかですたい、

今夜あ、魚貫へでも遊びにゆきまつせんか、

よか芝居がかかつとるですばい」

「俺あ疲れとる、

夕涼みでもせにや

明日の仕事に差支へるでの

お前あ強かだよかばつて

堪らんたい、夜晝通しぢやつ疲れりたい」

「そがん事あなかですたい

あんたあ何か考へとる

女房に話せん事があるぢやつせんか」

「莫迦な、俺あそがん男ぢやなかばい、
ひるの疲れで苦しかよ」

また此炭坑の惨めな人達に
どがん事したらよか暮しをさせられるか
その思ひで苦しかよ、
面白か氣持にもなれず
苦しかよ、そやつあお前も知つとる筈だ
に——」

「そりや、そらごとですばい、
あんたあ、どこ迄も白ばつくれる
ぢや言ひますたい、
こんハンカチあどがんたしです、
さあ、はつきり言つて
そら言ぢやなか言譯して貰ひたかです」

おあきの眼は野性の怒りに燃え上り
男の前に、美しい薔薇縫とりのハンカチを差
出す

おおそれは、手文庫深く秘められたもの
床しい香りとなまめかしい刺繡の美よ、

それはどんなにおあきの胸を痛めたことか
良人のあとを

息せききつて探し出した瞬間の憤怒！
聽て物靜かな態度の中に探る男心。
今は明瞭りとした！

男は隠してゐる
そして此處廣場のベンチに
物思ひの時を過してゐるではないか
琴の音が……

ふたりのとげとげしい心と心を柔らげる、
吃つとした男の面に
激怒の相は浮んだが聽て消え去り
女の嫉妬心を靜になだめる。

「それあの、茶屋の女から貰つたんばい、
そがん事あ氣にするぢやなかよ、
俺あ、お前んことばし思つとるんばい、
別れたあとで

お前んとこをたづねたのも
みんな可愛か心があつたからたい、

どがんして、そんげん茶屋女子に
莫迦な色事出来るかの？」

「それも空言！

茶屋の女は、こんげん美しかハンカチあ持
たんですばい、
あんたあ、隠し事しとるんばい
女房を追出したり
また呼びこんだり
その間にあどがん事やつとるか
知れたもんぢやなかですたい」

女の泪ぐんで責めたてる言葉！
天野五郎は愕いて、この天草女の嫉妬心を
泌々と、驚異を以て凝視する。
彼は此島の女に
嫉妬のころを見た事がない、
捨てられたらまた別れ
氣が合つたらまた夫婦
かうした社會の中に珍らしくも見出した嫉妬

のころ、
彼は犇々と迫る快感を覚え
新しい情熱の昂奮をさへ覚える。

「よかよ、よかよ
そんげん疑ひは霽れるたい、
みんなん衆にきくがいい、
また茶屋女にきいてもいい、
俺あ、今ぢや正しか身持
他の女に思ひをかけた事あなかばい。
お前ん疑ひ解く爲にあ
芝居でもゆくたい
こんまま家へ歸つてもいい、
そして俺の、望みを捨てても構はんたい、
皆の爲にじたばたしても
一文にもなるぢやなし
のう、おあき、
それより面白く酒でもものんで
憂さ晴らし、楽しか夜を過さうたい」

琴の音が流れてくる

夕涼みの人々は思ひ思ひに
ベンチへよつては空を仰ぐ。

それら休息に心を空しくする人々の間から
おあきと彼は連だつて山合ひの部落へ
和解の惑溺に身を浸さうと歩いてゆく。

恐ろしい情熱の噴出は

浄めかかつた魂を

再びもとの渾沌さへと落しこみ

ひたすらに願ふはただ惱亂のひととき！

生も死も

總てを放擲して吐く深い深い愉樂の後の吐息。

酒をのみ、

煽り立てた情炎の淵に

おおその身を沈めても

彼の肉体はただ疲れるばかり、

心は混亂と苦惱の柵から

一步も脱れきれぬ大きい苦惱。

醒めては迷ひ

迷つては醒める

男のころは烈しい戦場だ！

×

残暑に、更けてゆく夏

怠惰の生活から立上つた島人等は

收穫の秋を迎へてまめまめしく働き始めた、

それに比べて此炭坑の衰微はどうだ！

坑夫らの寂し氣な力ない歩み——

此時天野五郎は靈肉の争闘にのたうち廻り

おあきの余りにも烈しい情熱の力を怖れる、

そして清楚な

淑子の心情へと愛を注ぐが

ああ然しそれは空しい

所長の令嬢と一介の坑夫

自らの心を語り出す機會はない、

ただ遣瀨ない片戀の

その悩みに胸塞す頑健な男よ！

山々は、野邊は、

もう秋の衣を着はじめた、

朝に、夕に、風は涼しく

樹々は未だ深緑の香をたたえてゐるとはいへ

そこには眞夏の艶は失はれ

聴てくる秋、凋落の日を偲ばせる。

初秋の日——

炭坑の棧橋から出た一艘の傳馬船、

其處には華やかな装ひをした令嬢淑子が

羞恥と希望との熱情を明眸にたたへて

社宅の人々に挨拶を交はしてゐる。

いま彼女は嫁いでゆくのだ！

長崎の街に待つてゐる許夫のもとへ！

玲瓏とした心情を捧げる爲に！

魚貫港では

長崎通ひの汽船がいま到着の汽笛を鳴らす、

その微かな旋律の中に

麗人をのせた傳馬船はすべてゆく。

此時熱風の昇騰烈しい排氣坑では

天野五郎の懸命な労働！

大粹取替への難工事だ！

彼は全身を汗の中に浸しこみ

朦朧とする意識を振たて振たて

同僚相手に粹脚をたてる。

おおその素速い動作よ！

巧妙な作業よ！

難工事に直面しては奮ひたつ彼の力よ！

ほつとして捲立に出てくる坑夫等の心は

ただ冷え冷えと流れる空気を！

松丸太の上の長い休息を！

望んでゐる、熱望してゐる

けれども彼、天野五郎は

更に、更に、戀の苦痛を伴つて出てくる。

どうかしてまた逢ひたい

自分の心を言ひきりた

ぼんやりと、用事もないのに訪ねてゆくのは

……氣がひける。

おおさうだ！

今夜はひとつ

夜釣りをやつてその獲物を

あのひとの家に届けてやらう、

屹度悦んでくれるだらう、

また種々と話をきいたり

しみみりと自分の心をきいて貰はふ、

さうだ！ 今夜は眠らなくともいい

一晚かかつて夜釣りをしやう。

彼は自らの名案に獨り微笑み

捲立の新鮮な空氣に身を浸す、

幸福の影逐ふ者よ！

彼は總ての苦痛を快く容れて、明日の幸福を

希ふ、

夢をもつ人生

それがここに明瞭りとして現れた。

夜の潮が満ちてゐた、

一夜釣糸に魂籠めて

一杯のびくを覗きこむ彼のよろこび！
曉の、冷たい道を炭坑さして戻る姿
そこには夢が
桃色の夢が織り込まれる。

彼は勞働を休んだ、

そしてのんびりした午後さがり

所長の家を訪れて昨夜の獲物を

誇らかに差出す胸のときめき……

年寄つた女中が勝手元から赫ら顔を

ひよいと向けて愛想笑ひ

そして受取るびくの魚。

「生憎のう、

奥様もお嬢様も

長崎へ行かれたで

所長まさおひとりばい、

今夜、旨か料理でもつくらうばい

おうきにな、

これで助かりましたばい」

其言葉に

彼ははつとしてたぢろぎどつかと腰をかけ

しげしげと女中の顔に

猜疑の眼を光らせる。

「眞實かの

何日行かれたの

俺あちつとも知らなんだ

何か用ばしあつたとの？」

「うんにや、お嬢様のお嫁入りばい、

長崎ん婿さまへゆかれたとばい、

あんげん優しかお嬢様ばつて

もうこんげん炭坑にや見えんぢやろも。」

天野五郎はぐづたりと首うなだれて

亡靈の歩みを戸外へと運んだが

不圖立戻つてきく淑子の嫁ぎ先、

おお打のめされた男は悲戀の衣をまとひ

心の痛手を運命の魔に委ねたまま

とぼとぼと、力なく歩む炭坑の晝山路。

ぐわらんぐわらんと捲揚機の運轉は響く

其焦燥に逐はれる様に家の中へ

轉げこんだ彼の苦悶よ！

おあきはいそいと地下勞働へ

男の心情を引留めた悦びで行つたではないか。

信ずる者を裏切つて

彼は自らの悲戀へと陥ちこんでゆく、

莫迦々々しいと自らを嘲つても

心の歡喜はいつ得られやう

肉の飽滿にぐつたりする事は

此島にゐては容易いが

心と心との高らかな響きを

感じ合つて微笑むその幸福はいつ得られやう。

純情・悔悟

淑子様、

わたしは一人の坑夫です、

太陽の光りを仰げない土鼠同様

地底に蠢めいてゐる人間の一人です、

貴方はわたしを知つて被在るでせう、
天野五郎といふ名前は御存じなくも
貴女の生命を

また炭坑の危機を
僅かばかりの努力で救つた男、
そして薔薇の刺繡のあるハンカチを頂いて
心躍らした男と言つたらおわかりでせう。

わたしが何故此麼事を書くか
不躰けにも

人妻に書く此手紙
おお、ゆるして下さい。

わたしは今、苦しみぬいた擧句に書くのです、
運命の手に弄され

わたしは自分の夢を奪はれて歎くのです、
卒直に言ひませう、

わたしは貴方を戀したのです、
此淫らな島の生活に身を爛らした
荒くれ男の戀ごころ

ああ貴女はそれを理解して下さいさるでせうか。

貴女を知るまで

わたしは肉慾の世界に泳ぎ廻り
永遠をみない惨めな男でした。

けれどもあの炎熱の日の海上に
巖頭の貴女をみた瞬間の感激！

此麼言葉をゆるして下さい、
嗤はないで下さい、

わたしは人知れずあらゆる勉學に努めてゐた
のです、

そして片言ながらも思想を語る
言葉を次々とのみこんできたのですから――

貴女を始めてみた瞬間

わたしの心は淨らかに澄みきつたのです。
そして貴女を舟にたすけ

濱邊にかへるその間
わたしは自分の汚れきつた魂を

少しづつ洗ひ落し
始めて心の眼がぱつちり開きました。

わたしは貴女を救つたのではなくて

貴女に救はれた人間でした、

それ迄の享樂は力なく萎れてしまひ
新たに湧上つた心の愛が

そくそくと、魂を美しく美しく高めてくれま
した。

ああ然しそこには絶えない苦痛があります、
永遠を見詰めての焦燥と苦惱が

日夜わたしを虐げつづけました。
俱樂部前の廣場に呻吟してゐた時

貴女のお母様はわたしを呼入れ
また貴女の香はしい魂をみる事が出来たの
でした。

わたしは不躰けにも喋りたて
自分の心を曝け出し

貴女を幾分か驚異の中に誘つたのでした
其時、わたしは未だ明瞭と言ひきれな

つたのです、
わたしの現在の心を！

そこで打明ける程の勇氣もなく

また向ふみずの男でもなかつたのです。

過去の姿、炭坑の勞働として坑夫生活の眞相
それを語つたに過ぎません、

貴女はわたしに心からの贈物
移り香の濃いハンカチを

お禮の印だといつて下さいました。
おお其處にわたしの神は居たのです、

わたしの魂を捧げる神が住んでゐました、
それからのわたしは

日毎、夜毎、
あの薔薇縫ひとりのハンカチを眺めては

悶えを、苦痛を、また烈しい衝動を
少しづつでも柔らげ淨めてきたのです。

坑内の勞働、
夜のねぐるしさ、

さうした間にも貴女の幻影は、わたしを慰め
勵ますのです、

そして戀の力を泌々と悟つたのです。
わたしはもう一度逢ひたかつた、

自分の眞心をきいて貰ひたかつたのです、

貴女が拒絶なさる事は當然でせう、愛人を持つて居られた貴女に對してわたしは横戀慕をしたのですから……だがそれでもいいのです、

拒絶され、たしなめされてもいいのです、貴女にわたしの心が通じさへしたらわたしは一生片戀に美しく生きませう、さうした願ひで充たされたわたしはとうとう貴女に逢ふ手段を考へたのです、一夜、まんじりとも眠らずに舟を漕いでの夜鉤り

その獲物は豊富でした、わたしは炭坑の仕事を休み晝、貴女の家をお訪ねしました。感謝の言葉と

貴女の晴れやかな明眸を期待し乍ら……そしてまた胸躍らして家路にかへる自分を想像し乍ら……
運命の魔は嗤つてゐました、わたしはしほしほと戻つたのです。

打のめされたやうに力なく精神はだらりと弛んで大地の上へべつたりと座りこんで了ひたい思ひでみだされました。

貴女は嫁がれたと言ふのです、美しい夢の港、長崎の街に貴女はゆかれたといふのです、わたしは到々自分の心を此まま葬つてしまはねばならなくなりました、胸に秘めたままこれから先、幾十年を過すこととせう。

それは大きい苦痛です、堪らない受難です、わたしはもがき乍らも力をつけてせめて此荒くれ男の心根を

優しい、理解ある、貴女のお心に知つて頂きたい爲書きました、此亂暴な失禮な、

亂杭のやうな言葉のつらなりを、貴女はこれに對して憤られるでせう、返事などは無論のことこの手紙さへ焼捨てられませうがそれで満足です、

わたしは貴女を憤らしたことで満足します、わたしといふものが貴女の胸にいつ迄も、屹度こびりつくでせうから——さうだつたら？
ああわたしは幸福です、いつ迄もいつ迄も片戀の男で過しませう。

では——
新しい生活と、その幸福に浸つて被居る輝やかしい貴女の未來を遠く天草島の地底から祈つて居ります。坑夫の中にも
天草男の中にさへ
かうして戀に悩む男が居ることだけを御記憶下さい。

朝膳の支度をととのへて不圖見やつた机の上に
おあきは一通の手紙をみた。
女宛の量ばつた手紙

——山村淑子様——
彼女はぎくつと胸を衝かれてまだすやすやと眠る良人の顔をみる。
さうだ！この女だ！
あの美しいハンカチの持主
良人のふさぐ心の悪魔！

彼女はわなわなと震へ乍らも手紙を掴む。そして秘められた言葉の數々を痛む心に想ひ浮べる、
そくそくと、おお湧上る嫉妬情よ！
おあきは心昂つて良人を揺り起す。
「こんな手紙は何處へやるのですか？」
女子んとこへやる手紙

そやつを平気で女房の前に
圖々しくも見せとるあんた

憎かよ！

破くで！

焼くで！

彼女の聲は鋭く裂ける！

そして激怒の相は野性の猛惡さに一變し

良人の体に満身の力點！

愕いて飛起きた天野五郎の

素速い防禦と攻撃の手腕に

彼女の手から奪はれた手紙一通。

「莫迦！お前んしつた事ぢやなかぞ！

破くとあ何ん事だ！

焼くとあ何ん事だ！

亭主んものを勝手にしやがる

そんげん女子は出て失せろ！

お前んごと嫉妬いらいらやきあ

とつとここから出て失せろ！」

怒りにまかせて突倒す彼の力に

彼女は脆くも打倒れた。

男を眞實に愛した女は

今、嫉妬の創に苦悶の呻き！

肉の世界に飽満した男は

今、眞實の愛へと總てを犠牲にする。

「ゆきますたい！

出て行きますたい！

あんたばかりが男ぢやなかよ！

どがん男でも

女子の前にや弱かもの

よかです！あんたあ苦しか姿を

鼻で嗤つてやるですたい。

難かしい事あ解らんばつて

人情位あ知つとるばい、

あんたあそれさへ知らんぢやろも

女房ん眼を掠めて

よか女子とちちくりあつて……」

おあきは一本氣

島の女の奔放さで

自らをたしなめてきた眞實の生活を打捨て

淫らな島の風習へと舞戻る。

男の秘事を

騒ぎたてるは女の耻辱、

島の女は、男から男へ

また男達は女から女へ

未練のない進展をしてゆくのだ！

そのふるさとへ戻るころ、

肉慾のどん底に泳ぎ廻る愉悅さでみたされ

おあきは獨り涙の中に家を出る。

捨てた男に未練はない！

彼女は澁面の良人を振り返つて嘲笑ひ

島の女の生地そのまま、

炭坑の朝をぐいぐいと引裂いてゆくのだ！

それは何といふあつさりした場面であつたら

う

申し合せたやうに

嫉妬と

激怒と

そして罵る言葉の下で

夫婦別れがさらりとされた。

始業の汽笛はまだ鳴らない、

天野五郎は去つた女が

調へてくれた朝餉をとる、

彼の面に湧上るのは

さびしい悲しい微笑だけ

肉の世界から脱れた氣安さ

心の國に沁々と親しめる寂しい楽しみ。

彼は何事もなかつたやうに坑内へと下る、

仕事に熱は出ないけれど

それでも仕上げて歸る氣安さ

ひとりとなつた煩はしさも忘れてしまひ

米を磨いだり

茶碗を洗ひ

夕餉の支度をととのへるわびしさよ。

出かけに入れた手紙のこと

それをみた淑子の面？
愁ひ、苦悶、また激怒？
彼はそこに豊麗な面を幻に描く。
寂しくなれば

贈られたハンカチの香に
偲ぶそのひと——

かくて日は経つてゆく
寂しい乍らも心の安らひを力に
彼は坑内労働に
また炊事の煩はしさに
少しの倦怠もなく過してゆく、
そして望むはただ一つ
淑子からの返事手紙。

どうせ片戀の身だ！
俺はこの願ひをみたさうとはしない、
あの氣高い、それでゐて明るい女性が
俺の友達にでもいい、なつてくれたら？
手紙を呉れたり

逢へば親しく話し合へたり
おおそれだけで充分なのだ？
俺は外に何を望まう。

日は経つてゆく
けれ共返事は届かない。
彼は怒りにみちた淑子の面を思ひ
良人に見出される耻かしさを打碎く爲に
ずたずたに引裂いて焼き捨てる幻を描く。
けれ共彼の生活は次第に淨められ
誠實な眞面目な坑夫として
炭坑の人々に讃へられる歡びよ！

秋は深い！
南國の島は漸々に紅葉の山々を
島人の素朴な魂に
收穫後の安息と共に與へる。
天野五郎は其日其日の
採炭にいつも好成績で
彼の名は異常に人々の心へと喰入つてゆく。

秋風渡る地上から姿を消して
地下深く降つていつた彼の耳に
不圖きいた
同僚のひとりが港の町へ遊びに出かけ
妓樓の前におあきを見た事を——
その男は平然と言つた。

「俺あお前ん女房ば買つたとばい、
魚貫うしほから舟で牛深うしふかん町へいつたかへり
もう日が暮れてしまつたで
俺あ戻つたよ、あん町の女郎屋へのう
そしたらお前

おあきがにっこり呼ぶぢやつか、
今ぢやあすこの女郎衆ばい、
炭坑ん仕事をしたとも見えす
綺麗な女子になつとるばい、
おあきあ言つたよ
お前んことをいろいろとな。
そして一晩泊れといふし
俺もちつたあ嬉しかで

とうとう買つたとばい。
あん女子は、これから男といふ男を
みんな寝取つてやるちうでのう、
おあきあ凄か事言つたばい、
俺あ女房があるぢやなし
おまへん抱かれても憤るものはなかぞ
かう言つたら喃、
おあきあでつかい聲で笑つたたい、
お前もおあきが戀しかつたら
牛深うしふかんやまへゆけよ！
美しかぞ、よか女子になつとるばい」

其同僚は微笑み乍ら話し續ける、
烈しい憤怒に天野五郎は
その男の頭上を一撃せんと
さう迄熾烈な怒の情は湧上る。
けれども彼は堪へた！
自分の捨てた女ぢやないか、
誰がどうしやうと勝手氣儘
俺は俺だけ！

昇坑してから後もこの忌はしい事柄は彼の魂を虐げ續ける

「ああ俺は、女ひとりを陥れた！」

あの淫樂の淵に

情け容赦もなく振捨てた！」

人道的な彼の感情が顔を出すと

また島の風習と傳説が

自己辯解の言葉をつくる。

「此島では爲方がない

ああした事が幸福なのだ！」

娘達はみんなそれを目覓けて育ち

親達はさうして金銭をとることを考へる。

俺は何でもない！

悪いことをしやしない！

善いことも別にしない！

ただ俺の、眞實の心が解つてきたのがせめて

もの慰めだ！

ああ島の生活！

俺は俺だけの生活を進まふ！」

彼は自らの苦惱をもぎ取らうと焦る、
そしてひたすらに
純情の魂を
遠く長崎に去つた淑子へと捧げる。

返書

天野五郎様、

わたしは何と申し上げていいか解りません。

人妻の身です、

貴方のおこころはよく解りました、

純な方だといふ事を

今はつきりと解りました。

貴方は戀の爲に

大きい苦しみを自から抱かれる

そしてわたしの憤りを望むと仰言る、

その悲壯なお心は

わたしを泪ぐませてしまひます。

此様に大きい感動をうけた事は

今迄随分受取つた手紙の中で

ただの一本もありません、
貴方は眞實の心を仰言る
それが大きい力となつてゐます。
けれ共それら高いお心の動きは
今のわたしには關りのない響となつて
遠く懐しい島に、かうした心根の方が
自らを淨めてゆく姿を思ふのみです。

貴方は卒直に言ひました、

わたしも卒直に言ひませう、

わたしは人妻です、

慕つてゐた良人のもとに生活する身、

それは幸福です、

傳統の古い絆を自ら斷つて

わたしは堅實な良人をもちました、

きれいな男子ではありません、

けれども心情は愛と眞實に満された良人です、

わたしは幸福です、

それを貴方に吹聴しやうとするのではありま

せん、

貴方の心中に蟠わだかままつてゐる苦惱を

何卒拭ひ去つて頂きたい爲

わたしは自分の立場を明瞭りとお報せします。

わたしの兄は東京に居ます、

義姉は明るい生活をして

新しい婦人同盟に加はつてゐるのです、

家庭と社交と

そして情熱のままに生きてゆく義姉、

若しも、わたしと義姉が代つてゐたら

義姉が貴方のお手紙を頂いたとしたら――

そして此時

兄に對する愛情が薄れてゐたら――

義姉は、貴方の心情に陶醉して了ふでせう、

すぐにも貴方を呼寄せて

その勝れた體軀と、尊い体験に魅せられ

濃やかな、燃えたつ愛を囁くでせう。

けれども、わたしは余りに考へ深く

また一時の感激に身を委せられない性質たなの

です。

理智の女かも知れません、
けれ共、愛は、わたしの生命です。
わたしがかうして貴方のもとに
この手紙を書くのも愛の爲です、
社會の人々は早合點をしてゐます、
愛と戀とを混同してゐるのです、
けれどもわたしは
愛はひろく、深く、
戀は狭められた、限られた、
愛の一部と思つてゐます、
かうした信念の下に生きてゐるのです。
嫁いだ身、家庭をもつて
主婦としての務めにいそしむわたしです、
自分の務めを忘れてしまひ
利己的な、満足にのみに走れません、
ですからかう言ひます
貴方のお心は充分解りました
わたしは人妻として
貴方の胸に自分を永久に住まはせることは苦
痛です、

それは幻にしる
夢にしる
有爲な貴方を惱ますと知つたら
わたしは言はねばなりません
「忘れて下さい！」
忘れて下さい！」と、
眞實に貴方は
片戀に寂しく生きる方ではありません。
その偉大な抱負を
立派に貫徹させる大きい責任が
貴方の上にあるのではないでせうか、
其豊かな情熱を
戀愛に注ぐ苦しさを止め
貴方の大抱負に向つてあびせかけたらどうで
せう、
虐げられた人々の爲に！
盲ひな下層労働者の爲に！
導火線を點じて頂きたいのです。
彼等は待つてゐます！
徒らに賣名的な労働組合の幹部よりも

一人でもいい、眞實に自分等を救つてくれる、
導いてくれる、
武士的氣魄の所有者を望んでゐるのです、
西洋かぶれの淺薄な思想を述べたて
可憐な人々を偽瞞する大きい魔の手から
貴方は彼等を救はねばなりません。
大きい使命です、
それは到底、普通人には成し得ぬ事です、
尊い豊富な體驗と
それから生み出された思想の持主が
自らを犠牲にして始めて
完成出来る事なのです。
どうか忘れて下さい
わたしのやうな古風な女を
貴方の記憶から拭つて下さい、
けれ共わたしは忘れません、
貴方を一生の友として
深く深く心に刻んでおきませう、
そして蔭乍ら貴方の成功を
祈ることに、友愛のしるしを樹てませう。

貴方は優しい内助者を求めて
其處に新しい生活と氣力を生み出し、
眞實の人生を把握する時
貴方の苦難は酬はれます、
貴方の幸福は訪れて來ます。
何卒「片戀の男」といふ言葉を
貴方のお心から拭ひ取つて下さい、
歳暮にはわたしも兩親の下へ
良人と連れだつて歸れませう。
わたしは身分の隔てなどを考へてゐません、
誰でも同じ人間です、
心と心を語り合つたら
そこに少しの隔てもない筈です。
戀も自由です！
交際も自由です！
自らを高い境地へ導く爲には
わたし達は古錆びた因襲を捨てて
新しい時代の中に
確固とした人生觀を樹てる事です、
妻として

また聽ては母として
わたしは家庭に生きるでせう、
それだけです、
それでいいのです。
その家庭生活への精進がやがては
婦人運動の力となり
女性向上の源となります、
徒らに、時代の先驅を叫ぶことは
惨めな事です、哀れなことです、
大地を踏んでゐない人々の言葉です
また自らを深めやうとしない人々の逃避場所
です。

貴方は確りと大地に立つてゐます、
そこから叫ばれる言葉は眞實です、
時代を動かす大きい力です！
わたしはそれを願ひます、
有爲な貴方の爲に！
貴方の心盡しに酬ゆる爲に！
わたしは生意氣にも書きつらねました。

何卒忘れて下さい、
わたしの事などは念頭におかずに
あの惨めな地下労働の人々に
その廣い廣い愛情を注いで下さい。

貴方からのお手紙は手文庫に收めてあります、
また此返事のうつしも一緒に——
いつ、誰にみられてもいい淨らかな愛情の言
葉を記念する爲に。
わたしは貴方の事を良人に話しました。
良人はよく理解して
わたしの立場を少しも疑ひません、
眞實への努力こそ！
すべての誤解も、不和も
あらゆる障壁を叩き破る原動力です。

では
もうこれで筆をとめます、
呉々も貴方の
雄々しい前途を祈り乍ら——

坑内瓦斯爆發

優しい女性の手紙！
そこには淨らかな心の香りと
新時代の熾烈な呼吸が感じられる。
天野五郎は喘えぎ乍ら読み終へた、
息詰まる思ひ！
犇々と胸に喰入る彼女の言葉
自らをきつぱりと言ひきつた彼女の態度は
今、深い深い反省を彼に與へる。

ああ、俺は余りに無智だつた、
此處にも深い思想の若い女性に
どうして戀が語れやう、
一語一語ただ驚嘆だ！
噛みしめてゆく余裕さへない自分ではないか
さうだ！
俺はもつと勉強しやう！
淺薄な、概念の言葉を捨てて

眞實の言葉が語れるやうに努力しやう、
身も魂も、
直面だ！
大きい受難への直面だ！

彼は淑子の心を明瞭り感じた、
友愛をもつて自分をみる懐しい女性の心
そこに永遠の生命が湧立つ！
ひとりの女と別れても
それは習慣の道を踏んだばかり
世間では、少しも彼を批難しない、
またおあきの行爲をも罵らない、
當然過ぎる男女の間——
かうした眼がただ周囲にまつわり
島の生活はただ彼を
憂鬱の底へと沈み籠める。

彼は労働に總てを忘れやうとして
烈しい坑内作業！
鶴嘴は地下深く響き

鋸の刃は濕つぽい坑木を引裂く。
採炭箇所は次第次第に短縮された、
炭坑はすでに解散準備を始め
人々は冬を越す一つの怖れに
せめて春までの壽命をとひそかに祈る。

師走だ！師走だ！

その聲は萎れかけた人々を暗然とし
坑内ではあわただしく
生活に怯える人達の必死な労働。

かかる時

高雅な女性淑子の歸宅

若く懐かしい紳士と共に戻つた炭坑。
明るい人生だ！

新婚の日は経つて主婦の面ざしが
彼女の豊麗な容貌に現はれてくる時
片戀の惱み捨てかねて苦しむ男
天野五郎は地下深く下りてゆく。

左三片十二昇！

その瓦斯体蓄積の甚しい切羽に
汗みどろの採炭を勵む彼の心情！
坑外は寒風に肌荒れるいま
この地底は焦熱の闇、素裸の労働
まだ正午前だ！

採炭は困難になり

呼吸はつまつて必死の忍耐と苦悶
彼は疲れた！

息苦しい面を振向けて後山の少年に
思はしくない採炭の工合をもらす

「きつかばい、

ガスが多かでの

もう炭坑もおしまひばい、

こんげんガスが溜つちや

仕事も樂ぢやなかとばい、

お前も随分骨折つて

氣の毒かのう

またよか仕事もぶつかるで

こん次からあよか切羽へ

どがんしてもゆくでのう

きつかばつて辛抱して呉れよ！

「よかですたい

いつもよりあ悪かでも

炭坑んおしまひも近かですから

みんな勝手が言へませんたい！

眞黒な石炭まみれの顔に

安全燈の鈍い光りを

照りかへして慰める少年の言葉、

その汚れない面よ！

數々の誘惑に心惑はし乍らも

言ひ知れぬ未知の恐怖に純潔を保つ少年よ。

彼はみた！その純潔な少年の面に

淑子の面影を不圖見出す、

あの神々しい處女の面ざし

巧みない微笑と朗らかな言葉のメロディ、

處女の魅力は強い！

浸みこんだ魂の香りはぬけない！

彼は恍惚として

蹲まつたまま描く暗中の幻影。

靜かに靜かに、よりそつてくる淑子

氣品を持つたにこやかな面

觸れやうとしても觸れ得ない潜んだ畏力！

ああけれどもなつかしい微笑みだ！

心から愛してくれる眼差しだ！

彼はうつとりと幻に手をさしのべる

そして觸れたは

粗い炭層の採掘面！

彼ははつとして鶴嘴を握りしめた。

濃厚なガスの爲に

朦朧としてくる意識

神経は力なくぐつたりと萎れる、

力が抜ける

ざくりと落ちる石炭の音が

遠い遠い幻の國のひびきか

彼の意識はうすれてゆく。

少年は疲れ果てて坑木の上に
ぐつたりと仰向いたまま寝轉んでしまった。
倦怠と朦朧の意識がみちた坑内だ！
新鮮な空気が辛うじて捲立近くに
その爽やかな流れをつくるばかり。
この坑道深く這入つた昇り昇りには
悪ガスの集積が今頻りに續けられてゐる！
どの昇りでも
坑夫等は苦しげに喘えぎ
きまつた出炭量に達する願ひでみたされる。
苦しいといつて止められない、
賃銀が豫定の通りとれなかつたら
みじめだ！みじめだ！
いくら悔んでも飢えるばかりだ、
彼等は肉体を腐らせてゆく事に
少しの斟酌もしてゐない
そして眞蒼な肌を
ひきしめひきしめ石炭を掘る。
冬の坑内は著しく氣流が悪く

排氣坑も
入氣坑も
緩慢な流れをつくつてゐるばかりだ。
きけ！地の豫言を！
闇の豫言を！
恐ろしい炭坑の終焉の豫感さへ漂つてゐるで
はないか。
この凄じい大地の破壊！
それはいま
冬の日の午後
地下三百尺の左三片に兆を出した。

×
十二昇りの切羽では
悪ガスに苦しむ男の汗みどろな労働
少年は坑道に下りて坑木をえらび
十四十五の昇りにも必死に働く。
一函でも多く
石炭を掘り出したい願望にみたされ
肉体の腐蝕にかけてゆくのも構はない、

惨めな坑夫等の姿が地底に點在する。
もぐらのやうに

坑道を掘進してはそこに働く
太陽を知らない人間の姿だ！
炭坑は斷末魔の中にあつても、虐げる手を
ば止めない、
蒼ざめた人間の數々が
今地底の隅に蹲つてゐるのだ。
やがて其まま
いつかは埋められる肉体の果敢ない存在よ！

天野五郎は總ての精力を出し盡し
ほつとして休める黒い鶴嘴、
頭は痛む、
呼吸は苦しい、
一掘り一掘りに瓦斯体は濃くなつてきたのか
同じ坑道の十昇りから、十二昇りへと貫通し
た上添坑道には
闇の流れと
苦しい坑夫達が喘えぎ喘えぎ

鶴嘴ふるふ音が漾ふ。
彼の意識はぼんやりとして
力はぬけ
ぐつたりと腰を下ろして苦しげに休む、
すべてが終つた！
働いて、働いて、働きつくした彼は石炭の上
に
ごろりとばかり寝ころがる。
夢の世界だ！
魂の衰へて吐息つく一ときだ！

瞬間！
凄まじい音響！
眞紅な坑道の出現！
火焰の空気が！
物凄い烈風！叫喚！
彼の全身は烈しい熱風に煽られ
ごろごろと轉倒する感覚！
十三昇りへの狭い上添坑道を

不可抗の力に弄されてゆく彼の肉体！
彼は魂を吹飛ばした！
どこかへ遠く放り投げたやうに
渾沌と苦痛との瞬間的な錯綜、
そして意識は奪はれた。

紅蓮の熱風は十五昇りから
更に左四片へと凄じい破壊を伴ひ乍ら突入
してゆく。

そしてここ左三片の
十昇先の各昇りや上添坑道に
眞黒な人間の骸と
硬岩の崩壊！粹脚の挫折！
石炭崩落の下に呻く人間の聲！
そして恐ろしくも坑内全体に
ガスからガスへ！
炭塵から炭塵へ！
焔は狂奔を以て擴り擴る、
ああこの慘鼻なる光景よ！
四片に、五片に、

人間の生命は奪はれ、肉体は碎かれ
すべてを破壊の哄笑につつみこむ光景よ！

坑外は蒼白な人々の不安に驅られた焦燥にみ
たされ
坑口には坑夫らの家族が
引吊つた面に血眼の苦痛！
おおこれは炭坑終焉の姿ではあるまいか。
冬の陽は白々と西に傾き
冷えきつた潮風が山腹の肌を
うすら寒くも吹過ぎてゆく。

即死者を乗せた炭車は
哀悼の響きを籠めて坑外に現はれる、
白日の下に曝された骸
眞黒な肉體と皮膚の爛れよ！
縊縊々々の皮膚！
鶏の腐つた腸がそこには塗られて
ベラベラとむけてゆく無氣味な肌よ！
顔面は一杯に粉炭をぬりこめられて

膨れ上つた面

鼻や口の醜い歪み——

男の骸はがつしりとした中に強味をみせるが

ああ生白い女の骸よ！

そのぢりぢりに焼け縮れた黒髪よ！

半ば開いた瞳孔の乾枯れた光り

乳房はどこか？

あの圓ろらかな曲線の腹部は？

腰部は？

おお何物をも纏はない死體の凄慘！

毛といふ毛は凡て焼け縮れ

皮膚はべろべろにむけてどす黒い。

死者の家族達は絶望の眼を

この尊い犠牲者の上に注ぎ

聴て涙にぬれた諸々の手で運び去る。

良人の死に狂ひ泣く妻

また夫婦一緒に

骸をならべる悲壯な姿

それにまつはる譯しらす泣く幼児の聲よ！

ああ慘憺たる生者と死者の聲なき挨拶。

聴て重傷者の炭車が上る、

呻吟と苦悶と、烈しい死への反抗！

粉炭まみれの瀕死者から

冬空に投げられた叫び！

「ああ、ああ、

苦るしかよ！

苦るしかよ！

水、水、水！」

このかすれた叫びに疲れ果てると

がつくりと首を落してこんこんと眠る生と死

の境。

天野五郎はこの重傷者の一人だ、

全身は焼爛れ

ただ微かな呼吸に生命を保つ、

そして、看とる者もない孤獨の彼は

同僚の家族にいたはられてはいる病院。

そこには死の迎へが
白いベッドに
まだ薬品の匂ひの中に
彼の力の衰へをまつてゐる。

惨鼻なるガス爆發は

即死者五名十数名の重傷者と
軽傷者三十余名を出して終つた。

いま、寒い夕暮の闇が迫るとき
あはただしい死の幕は炭坑をつつむ。

混乱と絶望！
悲痛、困惑！

夫等人生の暗轉を司る苦しみに見たされて
闇へ！夜へ！と沈んでゆく。

歳暮のあはただしい気分は掻消された。

新春への憧憬も姿をかくした、
ただ暗然と

生活の必迫をも顧みない、自らを投出した人々
にみたされ

炭坑は
死の聲をはつきりと
自分自身の上なきく。

黒い手、白い手

彼の感覺は空洞になつた、
視覚がない臭覚がない

ただ僅かな聽覺に生の意識を甦へらせる。
何處だらう？

坑内か、それとも坑夫長屋の一室か
夜か、晝か

自分自身が誰か他人のやうに思はれる朦朧の
世界。

彼は全身に緊張つた感じを覺える、
頭が、顔が、胸から腹部へかけての重苦しい
思ひ、

それでも意識は次第に明瞭りしてくる、
膨れぼつたい眼を無理に開いて

自分の周囲をぼんやりと見廻す。

白いベッドだ！

薬品の匂ひがしてくる！
窓の向ふが眞闇だ、

天井の電燈が、艶消しの光りを空に漲らす、
そして彼は、病院の一室にゐる

助かつた生存者だといふ事に氣がついてくる。

おあきの顔が嘲笑ふ、
淑子のやさしい愛撫の眼が

慰め顔に物語る、
と、あの後山の少年が黒い面を

力なげに擡げては斷念めた口振りで炭坑の運
命を占ふ種々な過去の幻影が

恐喝したり
なだめたり

また短刀を振りかざした様にして迫つてくる。
あたりには誰も居ない

狭い病室にただひとり
深更の氣配に、心怯やかし乍ら

死の幻を逐ふ彼だ。

天野五郎は一夜うつうつとして
負傷の個所がどれだけか

それさへも知らずに幻の脅迫と闘ふ。
室の隅にある石油ストーヴからは

時々青白い焰が立上り
白々と曉の凍りついた風が吹く頃

彼の魂は疲勞の爲にぐつたりとして眠りこむ。

窓は白くなつた
灰色の空氣が揺れて

ちらちらと降る、雪、雪、
花辨のやうに

南國の雪は輕やかに大地へと吸つけられ
廳てあとかたもなく消えてゆく佗しさ。

着換えをしたらしい看護婦が
眞白な服をつけて這入つてきた。

そして眞赤になつた手を

ちよつとストーヴの上であたため
彼の枕元へとよつてくる

「どがんです？」

苦しかですか

もう先生も来るですから

我慢してのうきつかろばつて——」

彼女は繻帯をそつと摘んで

爛れた肌を凝視する、

そこには人間の生氣を失つた肉が

蒼黒く

薄明りの中にびくびくと動くではないか！

彼は睡つてゐる、

微かな呼吸が繻帯の裏に續けられ

そこに潜むは、ああやがて訪れる死の相

睡眠から醒めた彼に

明瞭りと健康時の意識が戻つてきた時

みよ！その窓邊には雪が吹きつけてゐた！

天草島には稀らしい大雪だ。

白く彩られた大地

斑らな路上の雪解けに

變災をしらぬ幼児らの戯れ遊び。

彼はそれらの明るい聲を明瞭るときいた、

窓を透して雪をみた、

灰色の氣配が、午後の空氣に潜んでゐる、

そして薬局室の方から

ひそひそと洩れるしめやかな話聲。

俺は一体どうしたのか

あの切羽で、眞赤な坑道を俺はみた、

熱風に叩きつけられ

それから先はどうしたらう、

此處は病院だ

ここには三つしか病室がない筈だ。

俺の居るのは手術臺か

間に合せのベッドかしら？

あの爆發で怪我した人達は

みんな此處に居るのぢやないのか、

隣りの室も靜かだ、

何事もないやうな氣配！

するとあの時やられたのは

俺達切羽の者ばかりか

あの少年はどうしたらう

ああさうだ、あの時は下の坑道へ下りてた筈

だ

俺だけが彼處に居たんだ、

俺だけが負傷したのか

全身が繻帯されてゐる

其處に非道い負傷だらうか、

痛くもない、苦しくもない

それにもう幾時頃かしらないが

腹も空いてこない

一体どうした事だらう

詳しいことが知りたい、

それにしてもあの爆發は何の爲か

安全燈でも壊したのか

マツチでも擦つたのか

まさか自然爆發ではあるまいが……

ああ、誰か来てくれるといい

友達もこない！

醫師もこない！

俺は一体どうしたんだらう。

彼は手を動かした

すると劇しい痛さが全身を驅めぐり

顔は一瞬歪みきつて

眼が繻帯の中に凝然とつぶられる。

脚は動かない、

體も動かない、

力が抜けたやうに

また重い錘りをのせつけられたやうに——

寂寥が颯と魂を掠つてゆく、

「ああ……ああ！」

力ない呻めきが枯れきつた唇を洩れると

愕いたやうに扉をあけて院長と看護婦が

瀕死の負傷者を凝然と見まもる。

「どうした、苦しいか

今に良くなる

ちいつとして

何も考へないでそのまま——」
炭坑醫は重々しい言葉をかけて
彼の手を靜かに握る。

「動かすと痛かですばい、
どがんなつとるですかのう

炭坑はどがんです、
怪我したもんは居なかつたか」

「ああたいたした事はなかつたよ

安靜に——

ぢいつと靜かに眠るがよい

いまに良くなる

またみつしりと働けるよ」

窓外の雪に眼を移した天野五郎は
そこに秘められた力を！

そのそくそくと迫る力を身内に感じる。

醫師の優しい言葉さへ

空虚な寂寞な彼の耳には

絶望の豫感を響かせる。

「そんげんですかの
よくなるですかの
こん固か肉體が

そがんなればよかがのう。」

光りを失つた眼

彼はまた窓外の雪景色をぼんやりと眺める。

そして醫師も看護婦も

暗然として室を出る、

どこからか

凍えた夕べの闇が

ひそひそと流れこむやうな病室。

彼は不圖きいた、

靜かな氣配を破つて

哀悼の響きをこめた葬ひの鐘、

雪は降る

寒氣はしんしんと大氣を凍えさせ

鐘の音は、谷の彼方へ、火葬場へ

哀悼のリズムをのこして消えてゆく。

おお誰かが死んだのだ！

あの爆發で死んだのだ！

可愛想に、誰だらう？

あの少年ではなからうか、

俺の親しい者だらうか、

そして俺も亦

あの鐘の音におくられるのか？

いや！いけない

其廢事になつちやいけない、

俺は起つんだ！

俺のする仕事は澤山ある！

炭坑解散の日でもきたら

同僚達はどうなるんだ。

また虐められて、裸のまんま逐ひ出される、

俺は生きる！

其惨めな境遇から救ひ出す爲に

また俺の片戀のひとの

あの高い心情と激勵の言葉に對しても

俺は立派に抱負を貫く！

さうだ！ああ凝然としては居られない、

あの鐘の音！
糞！惡魔！
失せろ！失せろ！

×

夜はきた

死靈が山合ひの焼場から立昇る時だ

あの脂肪ぎつた死骸が

ぴんと棺を弾き破る時——

灯が一つ、丘の病院へ——
その剝げた玄關に、二人の女性が訪れた。

肥満した吉本夫人と

水々しい丸髻姿の若夫人淑子

出迎へた院長は二人を應接間へと導き入れる。

「天野さんの御容態は如何ですか

逢つても差支えないでせうか」

吉本夫人は温顔を不安に曇らせ

院長の寂し氣な表情に身を慄はせる。

「駄目です、
本人は確りしてゐますが
何しろ全身の火傷ですから
身體の、三分の二以上に火傷をうけたなら
到底起つことは出来ないと言はれてゐます。
この患者もさうです、
夥しい擦過傷と
火傷とで體は衰へてゐるのです。
けれども氣だけは確かです、
時々譫語を言つて呻きますが
まあ、今夜位はもちませう、
即死しないのが不思議な位です、
私としても
出来るだけの手當はしましたが……」
「ああ、天野さんは絶望なのでせうか
あの方が……
いや、そんな事はありません、
もつと生きて
もつと爲る事の多い方ですのに……」

心を痛めた淑子は泪ぐんで
自らの耳を疑はふと心がけるが
其處には死の訪れがじりじりと迫つてゐるの
だ。
運命が
人間の都合などを考へないで
思つた通りをやつてゆくその姿が――

「御案内ませう
何しろ患者の氣はたつてゐますから
明日位迄はもちませう」
院長に導かれた室
そこには青白い焰をたてて石油ストーヴが
金盞の中から湯氣を頻りにたててゐた。
一つのベッドに
白くつつまれた男の寢姿
天野五郎はうつうつと、夢心の途を逍遙する。
「お見舞の方が……
さあ、眼をあいて！」

揺起されて、ぱつちりと意識を盛返した彼は
其處にまた夢の境地を見出した。
淑子が居る！
吉本夫人が居る！
變つた姿の淑子
人妻らしい装ひの女
おお彼女は本當に居るのだらうか。
「天野さん、如何ですか
苦しくはありませんか
痛みはしませんか」
「え、え、おうきに――
よかです、何ともなかですばい」
温い夫人の言葉に答へる彼の
感激にみちた眼よ、その泪よ
そしてぢいつと淑子を見つめる。

「とんだ御災難でしたわね、
天野さん、もうお苦しくはありませんの
わたしは貴方のお怪我をきいて
眞逆と思ひましたのに

矢張り、矢張り……
御災難でしたのね」
淑子はその眞心こめた言葉を
聴て逝く運命の男に注ぎかけたかつた
けれ共、側には
母がゐる、院長がゐる
ぢいつと耐へて無限の友愛を
ただ泪にうるんだ眼へとたたえる。

「興奮しないで、ゆつくり話をしなさい
もう直ぐ癒るんだから――
では奥様――」
院長は出ていつた。
夫人の眼にも泪、
死にゆく者の上に注がれる虚偽の言葉を
ぢいつと聞きしめて耐へる泪、
泣いてはいけない！
泪をみせてはいけない！
おお、夫人は心引しめる程、悲哀の情は
胸に、鼻に、その眼瞼に

満々とあふれてくる堰止め得ない力！
夫人も遂に室を出た。
ただ一人、淑子は俯向いて
流れる涙をそつと拭ふ。

「わたし、貴方のお手紙をみて
本當に、本當に感謝してゐますの
貴方の潔いお心が
わたしをすつかり感動させて
あんなお手紙を差上げてしまひました。
お氣に障つたら許して下さい、
わたしには
ああ申し上げるより外途がありませんもの、
わたしは良人と參てゐます。
もう二三日もしたら長崎へ
また家庭の中へ戻らうと思ひますの、
何卒、貴方は
早く健康なおからだになつて
わたしの願ひをきいて下さい、
貴方は坑夫達の中心になる方です、

屹度、大きい仕事をなさる方です、
わたしはそれを信じてゐます
ね、天野さん
わたしは貴方の永遠の友です——」

「ああわたしは感謝しますたい、
貴女のやうに心の高かひとから
あんげんよか手紙もろうて
わたしあ、もう思ひ残すことありません
たい
此度大怪我をしちや
生命も長かことあなかですたい
死ぬ事あ、そんげん辛かなかですばつて
仕事ん事思へば
矢張し、のう、生きてゐたかです。
自分の思ふ事ば一つでも
成遂げてから死にたかです、
ばつてのう、淑子様
それもこれも運命ですたい、
よくなつたらやりますたい、

貴女んお心をいつも思つては
自分を一生懸命勵ましますたい、
でも、のう

ああこれつきり息が絶えたらどうしやう、
わたしん魂は誰かの心に
喰ひこみますばい！
そしてのう、二代、三代と
そん永か中にあ、わたしの考へが
みんなん頭にも解りますたい。
そしてみんなあ同胞のやうに
樂しか日を送れますたい、
それが樂しみ
こんげん苦しきもみんなそん爲……
わたしあ炭坑ん人々から變り者だと
嗤はれますばつて、のう
これが人間の心ですもん
そして人々が救はれたら
こんげん嬉しかことあなかですたい」

彼はまだ理想を捨てない、

生と死の境にあつても
その尊い抱負を捨てない
淑子は感激した！
泪をぽろぽろと落し乍ら
ぢいつと彼の面をみつめ
その烈しい友愛のしるしは
男の手を夜具の下に探つて握る強い力！

「よくなります！
貴方は必ず全快します、
そして人々の爲に
その理想は實現されませう……
氣を落さずに、
早く、早く、
人々の爲にも一刻も早く
癒つて下さい、起つて下さい
そして心を安らかにして……」

彼女は自分の虚偽に直面して
其言葉を振捨てやうとするが

あ然し今死の迎へをうけてゐる男に
きつぱりと死を告げる正しさをとれない。
虚偽でもいい、偽瞞でもいい
わたしの本心が曝やいてゐる、
死にゆく者を苦しめること——
死にゆく者を煩惱に陥しこむこと——
それは罪悪だ！
確かに正しさを踏んでの罪悪だ！
わたしは飽迄虚偽の言葉を
このひとの魂にふり注がう、
そして安らかな死の手をその胸に
氣づかぬやうにおいて上げやう。

美しき性

天草の港、牛深うしふかの町
その東に町を離れた高樓の一廓
そこは人肉の市
そして華な自棄の嬌慢が流れ
年の瀬が近いといふのに

ここだけは、明るく明るく放縦の世界をつくる。

紀の國樓の二階では
轟々とひたよせる大灘の潮風をきき乍ら
明るい電燈の下に酒宴はる男女ふたり。
「えらう吹くのう
これちや明日の出船も駄目ばい。
また流連か
かうしちやみんな絞られるで
いくら稼いでものう、玉菊
お前ん身受けなどあ駄目ぢやのう」
潮風に色黒くなつた
四十近いでつぶりした男が——
淫慾に燃えた面を
女の側へ近づけて頬を吸ふ、
「いけすかん！
あんたあ、そんげん氣ぜはしぢや
いつも女にあ、振られますたい、
船長さんは、もつと落着いて

ゆつくりせんにや——さあ
一つ熱いのを……ぐうつと
さう、さう、美事、美事！
褒めとらすぞよ！
ははははは、さうさう、そして……」

娼妓玉菊は嬌艶に笑ふ、
その眼ざしは
意地に立つて肉慾にひたる相すがたか
かつては心籠めた世話女房おあきの眼。

彼女は夜毎夜毎の快樂に
自らを鞭打ち、叩きのめして
その言ひ知れぬ快感に酔ひ狂ふ、
そして今、有福な船長の心を捉へ
自らはあらん限りの艶麗と美装に
次々と男の肉體を吸引する魅力、
彼女に繰られてゐる男は幾人か。

船員、漁師、村の若者

または内密にしのぶ若い××
それらを次々と繰つてゆく彼女の心よ、
男性への復讐ふくしを名として自己の快樂に
また自己の快樂を名として男性への復讐
家庭に波瀾を捲起し
友情を叩潰し、愛情を爛らす
そして彼女は世間の口を注意する。
妖婦との罵り、男性破滅のすがた、それら苦惱の
言葉をきく時
彼女は勝利者の歡喜に狂舞する。
彼女はバンパイヤだ！
男の精根を磨りへらして歡喜の頂上に
その爛れた豊満の肉體を亂舞させる。

今宵亦、馴染の船長と汲み交はす酒盃
玉菊は酔つてきた
赤い湯卷はしどけなく膝にまつはり
男を惱殺する烈しい蠱惑こまごまよ！
夜は更ける
波の音は騒々しく

潮風にのつて軒を叩く

おおかかる時、

情炎に包まれた二つの肉体が

ぐつたりと疲れてやすむ暗の室。

この時、三里隔てた炭坑では

混乱の中に死者の霊は飛び

瀕死者は末期の水を呼んでゐる……

人々は闇の道を一散に走つて

牛深の町に醫者の應援を

また看護婦の派遣を依頼した。

其夜、港町に

忽ちひろまつた炭坑爆發の噂――

けれどもここ享樂の山合ひには

餘りにも隔たつたこの境地には

噂さも入るのを躊躇したのか？

白々と夜は明けた、

南國にはめづらしく寒冷の朝

雪さへちらちらと催してきた時

惑溺の後の玉菊と船長は
まだ温い寢床にねむる。

炭坑の噂さは聴てこの巷に
恐ろしい渦を巻いて流れこんだ！

「炭坑爆發！」

「ガス爆發！」

娼妓の口から口へ！

そして馴染の坑夫を氣遣ふ女心が

正午近い遊興の樓々にとみちあふれる。

元氣直しに朝酒を

船長と玉菊は酌みかはしてゐた、

「玉菊さん――」

きんの、炭坑でえらか事があつたですばい、

ガス爆發！

死人も怪我人も

えらかとんことですばい！

やりての言葉

彼女は突風に見舞はれた一本マストか！

あらしだ！あらしだ！
心の中は凄じいあらし。

ああ若しや、若しやあのひとに間違ひが

あの憎い男に！

死神よ憑りついてくれ！

けれ共……あのひとが

死んではいけない！

どうしやう、どうしやう

若しも死んだ坑夫の中に

あのひとが居たら？

それを自分は願つてゐたのだが！

いや、いけない！

あのひとは死んではならない、

若しや大怪我でもしては居まいか？

あのひとに傷一つつけてはいけない、

あの人が死んだりしたらどうだらう、

此自分の今の苦しみ、

罪惡を一つ一つ重ねてゆく此苦惱が

ああいつ酬はれるのか、

あのひとは頑丈で負傷者の世話をやく
さうだ！それでこそ今の自分は生きてゆける、
復讐の相手がなかつたら
此生活は力なく萎れてしまふ。

玉菊は心に叫んで

やりての面を憂はしげにみつめる。

「死んだもんは解らんかの」

怪我したひとあわからんかの」

「死んだもんは十人とか

死ぬばかりが十五人

そんげん人あ噂してますばい」

「きつかばつて

一つそれらんひとばしらべての

さあ、これあそんお禮ですばい」

彼女は、つと船長の袂から

取出した財布を開いて札をぬく。

苦々しい男の笑ひに

彼女は妖艶にしなだれて

立去つてゆくやりての姿を泪で見送る。

晝はきた、
酒にも疲れ
また寢室へと男ははいる、
そこに町へ出たやりては歸つた、
その物語、委しい炭坑の混亂した姿、
死者の中に彼女はきいた
かつては地下深く共々に働いた人々の名を
また重傷者の中に
同じ生活の親しみに交はつた
女坑夫の名もきいた。
おおそして最後に
死魔とたたかふ男の名前
天野五郎の瀕死な事を！

「あつ！やられた！
やられた！
あんひとが大怪我をした！」

浄化の淡雪

玉菊はもうおあきの姿だ！
美しい装ひを捨て
髪を崩し、後に束ね
そして足袋跣足の懐々しい姿。
彼女は雪道を息切つて歩く、
細い海岸の道
断崖の上に、或は砂濱に
その姿は明滅して魚貫村の方へと急ぐ、
彼女は總てを忘れた、
ただ懸命な歩行
女の足で三里の嶮路を走つてゆく。
日は暮れた、
生家のほつりを驅抜ける彼女の心情よ！
今はただ高らかに波をうち
天野五郎を氣遣ふ一念！
峠を越して
炭坑の灯に見入つた時の彼女の眼
ただ泪、泪、

それは悲痛の泪か
苦悶の泪か
また呪ひの——結晶か。

おあきは病院へと眞直に急いだ。
闇の下りきつたなつかしい思ひ出の道を！
ああそこには
罵り返し、振捨てた男が
運命の前に呻吟してゐるのだ。

彼女は何の爲にきたのだらう
男を嘲笑ふ爲か
懐しい過去の思ひ出に浸らうとするのか
呪咀か、慰撫か
彼女自身にも解らない一つの力。

酔つて止める船長を振りきり
自ら飛出してきたその目的
それは何の爲だらう。
もう夜だ！

あの病院に
あの灯の見える病院に
あのひとは寝てゐる、
あのひとは呻めいてゐる、
何と言はふ
何と語らう
捨てた男だ
ああ何しに此處迄きたのだらう。
おあきの心は烈しく波うつ、
そして自づと病院の中へ
案内もなく這入つてゆく。
その時彼女はみた、
高價な女の足駄を二足
そしてまた薬局室の前にも毛皮の襟巻と天絨
のコート
應接室からは女の聲が……

豫感！
戦慄！

嫉妬!

彼女は訪れもなく扉を排し飛込んで
そこにみた吉本夫人と院長の憂はしげな面
持。

「おお先生!

天野さんはどつちです、

見舞に來たてすばい!

牛深うしふかから、こん雪ん中來たてすばい、

逢つてもよかですか

何處です、どん室ですか?」

彼女の眼は血走り

そこに嫉妬と悔恨の烈しい渦巻!

看護婦に案内されて

通つた室、天野五郎の病室に

つつましく語る淑子と彼の姿!

おあきは立止つた。

ちいつと燃え上る眼の光りは

捨てた男と所長の娘に注がれる。

「おおおあき!どがんした?

お前うしふかあ牛深で稼いでゐたぢやつか、

何しにきた、

俺のこんげん醜か姿を

嗤ふ爲にわざわざ來たとか

うんと嗤つてくれ!

罵つてくれ!

俺あきつと見返してやるで!

天野五郎は昂奮した面に

自分を捨てた女への怒氣をたたへた、

淑子は愕いて振り返り

おあきの妖艶な姿と物凄しい眼に怯える。

「これは以前の女房おあきです

心と心が合はない爲

夫婦別れをしたとすばい、

おあき!こん方あもう

吉本所長のお嬢様、

今ぢや山村様の奥様ばい

俺がこん夏

濱でお助けした方ばい
それでわざわざ、お見舞にきて下すつたとぞ!」

淑子はしとやかに挨拶したが

おあきは

解けぬ憤怒と嫉妬に燃えて

熾烈な眼差を注ぐばかり。

淑子は悟つた

おあきの心を、その憎惡を

そしてしづかに口を開いた。

「貴女は誤解していらつしやいます、

わたしが若い女である爲

天野さんは疑ひをうけ

貴女の折角な心盡しが、歪められます、

そして此高められる魂はつまづきます、

今この方は、高い心に辿りつかうと

永い間の苦しみを經て

その酬むを受けやうとされる時です、

この方の一本氣もあつたでせう、

また貴女のそれに伴はぬ無理解さもあつた
でせう、
けれ共それは小さい事です、
この大きい、廣い、愛の下には
すべてが葬られていいのです」

愛にみちた淑子のところは

死の床に、光りを求める天野五郎を

犇々と、感激の中に包みこんだ。

彼の澄みかけた眼光は

傲慢にも、

睨んだ眼を少しも弛めないおあきへと

烈しい憎惡となつて浴びせかける。

「そがん事あ……

言はんがよかです!

この女子あ何も解らん賣女ばいめです!

女郎ぢやうらうです!

こんな女子ぢやうしに口きくさへも、貴女の耻辱はぢぢ
もう黙つて

莫迦な女子の歪んだ顔（つら）をみるがよかです、
ああ俺あ……

俺あ、一度でもこんげん女子を
女房にしたが口惜しかです」

×

「いいえ、それはいけません
貴方にも似ない卑怯さです、
おあきさんは淨い方です、
肉體がどんなであらうと
貴方を思ふ純情さ！

その氣高い眞實さは偽りない光りです。
わたしのやうな家庭の女は
言ひ知れぬ不快を堪え忍び乍ら
虚偽の假面を身につけてしまひます、
それはこの社會が
幾つも拵らへた首枷の中のひとつです、
抜けきれない可弱い女性を
一締め締めて嘲笑ふ歪んだ社會の相（すがた）です。
けれ共おあきさんは

それらの枷を引裂いて進んだのでせう、
かうして遠く港の町から

夜道をかけて訪れた心根、
それに、それに、わたしは感謝します、
そのお心だけで胸が塞され
自分の小さい力を泌々と感ずるのです、
天野さん、貴方は宥してお上げなさい、
此麼心の淨い方を——

純情な優しい愛情をもたれた方を——
さあ、貴方は快よく宥して上げるのです。
ね、さうして、
貴方は幸福を確りと抱きしめ
あなたの世界に！
あなたの光りに！
心おきなく進まなければなりません」

淑子の言葉は泪に曇つた。
自らの虚偽を心に咎めては苦しく喘えぎ
あと一日とはもたない病床（べど）の男を
神々しい愛情の下に見詰める氣高さ！

「ね、おあきさん

貴女は天野さんを宥して上げる大きい愛情を
お持ちでせう、

わたしは知つてゐます、
貴女はわたしに嫉妬（しよ）を覚え
わたしがたじろぐとお思ひでせうが……
わたしは決して疾（まよ）しくはありません。
わたしには良人（らうにん）があります、
また理智の芽も、伸びてきた今ですもの
友情の下に
災難（さいなん）の鞭（むち）をうけた天野さんを
慰めて上げたい許りにお見舞（みま）いしました。
貴女はお心を鎮めて

この方を看護して下さい
以前のやうに、幸福な家庭をもつて頂きたい
のです、

わたしには貴女のお心が
よくわかつて嬉しいのです、
汚れないところ
社會を呪ひ乍らも正義と眞實に

絶えず努められるその靈魂（たましひ）

それが光りです、
それこそ天野さんの求め續ける光りです、

この方の光りは貴方です
おあきさん、さあここにきて
言つて下さい
話して下さい
貴方はこの方を慰める唯一人の方です」

おあきはうなだれる
淑子の言葉を胸にうけて
ただうなだれ、その眼（まなこ）は泪の氾濫（はんらん）。
おおそれは汚れた肉體を淨めてゆく一つのし
るしか。

彼女は迫りくる嗚咽（めいげん）に堪えかね
ベット（べつと）の側に泣崩れ
犇（せう）と握る——男の手、感激の把握！

「ああわたしあ……わたしあ
どがんしたらよかかのう、

こんげん身を崩し
こんげん阿呆んなつて
ああわたしあ莫迦でしたばい、
あんたあ、宥してくれるかの
魂なくした女子です、
それが今たつた今
奥様のお言葉で
はつきり解つてきたとですばい。
あんたを捨てたあ悪かつた
ああどがん責苦でもよかです、
あんたん氣の濟むまで
どがん責苦でもして貰ひたかです」

「ああ、俺も苦しかよ
淑子さまんお言葉あ
有難いお説教ばい。
今始めて、俺も心の眼が明いた、
人を憎むなあ間違つとる
ばつて凡夫の浅間しさ
ちつたの事に腹たてて

男の力で意地張つたも……
ああそれが悪かよ、俺あ自分がわかつてきた。
おあき！お前あ随分苦勞したのう、
宥すよ！

俺あ淑子さまんお言葉通り
奇麗さつぱりと宥してやるよ！
泣かんでもよか、
もう心の解けた今ぢやつか、
ああ何だか心がゆつたりしたぞ
重荷が下りて
體が軽くなつたやうばい……」

彼は涙にぬれた女の面に
手を觸れてぢいつとつぶる涙の眼。
あたたかい涙、ぽろぽろとあふれる涙、
それは火傷の掌にしみてゆく
快い痛さ！
ぢいつと耐へて死の一步前に
泌々と味はふ幸福の時。

希望の光り！和解の氣安さ！
そして幸福を捉へ得たふたりの男女は
泣けるまま
涙のかれて盡きるまで
しんしんと寒さの募る室になく。

「それで幸せです
わたしも心安く貴方がたの幸福を祈りませう
餘り心を疲らせては
お體にも悪いでせう、
また明日の朝——では天野さん
左様なら……左様なら
おあきさんは今晚ここへ
お看護をして下さるでせう、
え、さうして頂いたら
天野さんはどんなにどんなにお幸せでせう、
心しづかに、魂も肉體も
休息と、光りとを求めて……」

淑子は氣丈な彼の面に

潑刺とした生氣を認めた、
明日も、明後日も
或は奇蹟的に快癒の床を拂ふかも知れない、
彼女はひそかに奇蹟を信じて室を出る。

解けあつた心と心
また愛情のまんまんとした女性の心——
雪降る夜
炭坑の病院には灯が一つ
明るく、際立つて明るく……
廳て一つの提灯は
濱近い社宅の方へと下りてゆく。
その灯さき
ちらちらと舞ふは雪
大地をつつみきる淨化の雪。

永遠に生きるもの

求め求めた光りの母胎
おおそれは今鮮かに彼の上へと降臨する。

言ひ知れぬ法悦

恍惚と周囲を見廻す澄みきつた眼

憤怒も

反抗も

また執着の戀愛も

すべてがさつと拭はれた心の安らかさ。

寒さと闇はひたひたと濃くなり

更けてゆく夜

おあきはストローヴをベッド近くへと引寄せ
凝然と蹲つて體をぬくめる。

ふたりは何も言はない

黙つて、眼と眼の物語——

そくそくと湧上る情熱の力に

すつくと立上つたおあきは情熱こめて

堪えられぬ愛情を男の唇へ——

ああ然しそれはかさかさ乾き

冷たく紫に色どられてゆくではないか。

しんしんと夜は更ける、

あたりはもう睡りの真中^{まなか}

ただひとり、彼女の烈しい胸の高鳴りよ！

「こつちでやすみなつせんか
夜具もあるですばい

寒かでの——」

やさしく聲をかけた看護婦に誘はれ
おあきは心のこして別室へ——

眼をつぶつても

数をかぞへても

睡れない、氣は昂るばかり、

窓にさらさら、雪の音。

呪はしい豫感が起る……

彼女が起上つて病室へと驅込んだ時

其處には雄々しい男性の魂が

死の招きに快く引入れられて

安らかに、心しづめて

一步一步近づくと時だ。

愛に！

希望に！

總ての悩みを解いた男は

静かに、安らかに、呼吸を深め

全身の火傷も痛みうすらぐ。

ただ迫るは死霊の手、蒼白い骸骨の手

おあきは何氣なく手を觸れて愕く。

冷たくなつてゆく！

冷えきつてゆく！

胸に顔伏せ

微かな鼓動を感じては一時の安堵。

彼女は今まんじりともせず

男の側でみとる心情よ！

昨夜の快樂は何處に？

あの凄腕と謳はれた玉菊の姿は何處に？

ここに蹲るは純情の女

甦つた心を捧げる眞摯な女性。

闇はうすらぐ……

一番鶏のとき！

雪はやんだ、大地は白雪！

この淨められた天地の中に

淨め、安らひに微笑む男性の魂は昇る、昇る。

「どがんです、苦しかですか

痛かですか？」

彼女は男の冷たい手をとつて

獨り居の寂しさに問ひかける。

ああ然しこの時

天野五郎の生命は朗らかに燃え上り

美しい焰をのこして消える瞬間！

呼吸がしづかに少なくなつて

顔色が！眼が！

生氣を失つてただ深い瞑目

安らかな面よ！

淨められた魂よ！

今は幸福な白衣をまとひ

しづかに、しづかに息を引とる。

鶏鳴が曉の嚴寒をふるはす時
灰色の室に
死んだ男と
なき伏した女の姿。

大地は白い

雪はすべてを淨めさる

遠く炭坑の捲揚機が

力なく、ぐわらん、ぐわらんと運轉する響。

ああ傑れた坑夫の魂は去つた。

純情な女の魂は泪に溺れる。

そしてここに

炭坑も亦やがては

同じ運命の盃をとらうとしてゐるのだ。

— 完 —

附

記

炭坑の術語大意

繰込部屋くりこみべ（坑夫に作業箇所を割當る部屋のこ
と）

切羽きりば（石炭を掘る現場）

本卸ほんおろし（主要坑道で入氣坑となり、石炭搬出や、
通路となる。此作に於ては主要斜坑のことで、
他に之と並行して排氣坑がある）

片かた（例へば左三片といふと、坑口から三百尺
下つて、左側に水平に掘進された坑道のことを
いふ。四片が四百尺といふ工合に、便宜上百尺
毎に附した名稱である。然し種々の事情によつ
て、百五十尺乃至二百尺、或は夫以上の間隔を
もつ場合もある）

昇のぼり（例へば左三片五昇といふと、左三片の第
五番目の採炭昇坑道のこと、水平坑道から採
炭場にゆく坑道である）

火番ひばん（水平坑道で入氣坑に近い場所に設けら

れた所謂火の番所である。喫煙所であり、また
火藥點火の火種を貸與する所である）

捲立まきたて 入氣坑道と水平坑道との接合點をいふ。
炭車を此場所から捲揚げるので此名稱がある）

先山さきやま（採炭坑夫のこと）
後山あとやま（採炭夫の補助をする、坑婦や少年坑夫
のことをいふ）

此作中の天草島に於ける炭坑の術語は大體以
上のやうで、他は一般的に用ひられてゐる言葉
であるから別に解説はしない。

方言の大意

よかですばい(いいですよ)
 やらうぢやつか(やらうぢやないか)
 きつか(疲れた、苦しい、の意)
 仕事ばしあるかの(仕事でもあるのかい)
 どがんかの(どうだ、どんなかの意)
 そんげん事(そんな事)
 ……ですたい(……ですよ)
 居るぢやつせんか(居るぢやありませんか)
 こんごろあ(此頃)
 そがん事(そんな事)
 こんげん(こんな)
 ……しとるとばい(……してゐるんだ)
 あんたんこと(あなたのこと)
 よかかの(いゝから)
 ばつて(でも)
 こがん處(こんな處)
 そらごと(嘘)

おうきに(有難う)
 まこて(本當に)
 お前んごと(お前の様な)
 牛深んやま(牛深の遊廓)

此作中の方言は大體以上のやうなものが、種々と織込まれてある。會話の場合々々によつて幾分の變化はあるが其意味は同じである。

昭和六年八月廿五日印刷
 昭和六年九月一日發行

定價壹圓

長篇小説
 炭坑夫



著作者	佐藤信重	東京市外世田谷町油尻三六〇
發行者	大島虎雄	東京市外目黒町下目黒六二一
印刷者	岸田武男	東京市外馬込町北千束七七二番地 電話在座二四〇六番

發行所 東京市外目黒町下目黒六二一
 發賣所 東京市牛込區天神町五三

海圖社出版部
 詩と人生社
 振替口座東京五七一六九番

1931. 10. 2.

淡
吟
の
表
紙
の
成
分



